

明日に生きる

—作文コンクール入選作品集—

第28号



平成29年度

東京都産業教育振興会

表紙デザイン

ものづくりのイメージをそれぞれ手に持っている「レンチ」と「ペン」で表現しました。パソコンで作成しました。

東京都立杉並総合高等学校
2年 美術部 田代 木実

明日に生きる

第二十八号

— 作文コンクール入選作品集 —

明日に生きる 第二十八号 ― 作文コンクール入選作品集 ― 目次

講 評

作文選考を通して

中学校の部

選考委員長（町田市立真光寺中学校長）

矢 島 加都美 1

作文選考をとおして

高等学校・専修学校の部

選考委員長（東京都立農業高等学校長）

齋 藤 義 弘 2

表彰式の記念写真

中学校の部

ページ

最優秀賞 働いて得たエネルギー

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年 山 浦 理 桜 5

優秀賞 私にとつての「ものづくり」

新宿区立西早稲田中学校 三年 竹 垣 李 莉 花 7

優秀賞 完成の先

東村山市立東村山第四中学校 三年 小 野 寺 柊 人 8

佳 作 生活を支えてくれる機械

中央区立佃中学校 二年 尾 形 慎 10

佳 作 物づくりから学ぶこと

中央区立佃中学校 二年 小 林 大 輔 11

佳 作 つらいけどやりがいがある

墨田区立吾嬬立花中学校 三年 大 田 睦 紬 12

佳 作 職場体験を通じて学んだこと

品川区立日野学園 八年 高 松 慶 14

佳 作 ものづくりの“最適化”

大田区立大森第一中学校 一年 河 野 凜 15

佳 作 製作者でなければ気付かなかったこと

大田区立大森第一中学校 一年 横 尾 祐 乃 17

佳 作 私の未来図

渋谷区立鉢山中学校 三年 山 口 る り か 18

佳 作 たくさんの体験から学び得たこと

杉並区立松溪中学校 二年 小 林 香 穂 20

佳 作 仕事のやりがい

豊島区立千登世橋中学校 二年 萱 里 笑 花 21

佳 作 生活を色どり豊かに

北区立稲付中学校 一年 青 木 徳 子 23

佳 作 作ることの喜び

北区立稲付中学校 二年 小 平 蒼 24

高等学校の部

佳作	「自分の職業」に対する考え方	北区立稲付中学校	一年	福島有紀	26
佳作	五日間の勤労留学を終えて	荒川区立第七中学校	二年	宮坂羽衣	27
佳作	ボランティア活動で得たもの	荒川区立第三中学校	三年	永山琴	29
佳作	職場体験から見る社会	東村山市立東村山第四中学校	三年	神澤由己	30
佳作	私らしいものづくり	町田市立真光寺中学校	一年	近澤爽風	32
佳作	相手の気持ちになる	町田市立真光寺中学校	三年	武田千陽	33
佳作	職場体験で学んだこと	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	大嶋育実	35
佳作	働ける理由	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	小野満里奈	36
佳作	気づかれるためにはなく、誰かのために	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	齋藤小桃	38
最優秀賞	決意	愛国高等学校	三年	隈部愛	40
優秀賞	家畜とペット	東京都立瑞穂農芸高等学校	二年	四宮桃	42
優秀賞	分岐点	東京都立田無工業高等学校	三年	柿原美咲	44
優秀賞	資源管理と漁村の活性化	東京都立大島海洋国際高等学校	三年	福田祥太	46
佳作	病院実習で学んだこと	愛国高等学校	三年	白川葵	47
佳作	受け持ち患者様から学んだこと	愛国高等学校	三年	照屋小町	49
佳作	馬中心の高校生活	東京都立農芸高等学校	二年	松岡翼	51
佳作	牛を通して経済動物を学ぶ	東京都立農産高等学校	三年	岩田愛彩	52
佳作	「酪農」素晴らしい経験・体験	東京都立農産高等学校	一年	上田寛敏	54
佳作	食品廃棄物を減らすことで救われる命	東京都立農産高等学校	二年	小野田柚香	55
佳作	貢献できる生き方	東京都立瑞穂農芸高等学校	二年	春日鈴音	57

専修学校の部

佳作	考えよう 命の大切さについて	東京都立瑞穂農芸高等学校	三年	原田 未崎	58
佳作	私の目指す、将来の伊豆大島	東京都立大島高等学校	三年	今江 一詩	60
佳作	たった一つの目標	東京都立小金井工業高等学校	三年	小野 幸帆	62
佳作	持続性	東京都立小金井工業高等学校	一年	川崎 スイモン 利文	64
佳作	日本の生活で学んだこと	東京都立田無工業高等学校	三年	瀬谷 イアン	65
佳作	乗船実習で出会ったマチ類と耳石	東京都立大島海洋国際高等学校	三年	柳田 有斗	67
佳作	私の将来の夢	国際理容美容専門学校(美容高等科)	一年	村野 萌	69

ページ

最優秀賞	授業を通して学んだこと	東京エアトラベル・ホテル 専門学校	二年	大津 紗理依	71
優秀賞	私の進路、将来の夢	東京エアトラベル・ホテル 専門学校	二年	秋田 真佑	72
佳作	私の生きがい	東京エアトラベル・ホテル 専門学校	二年	下村 拓海	74
佳作	学習に対する心構えと学んだ事	青山製図専門学校	二年	加藤 真実	76

応募校等一覧表

作文コンクール選考委員名簿

あとがき

作文選考を通して

中学校の部 選考委員長

矢 島 加都美



今年度は、33校116編の応募がありました。ただ、一つの学校から事務局に応募できる応募数は決まっているため、この10倍以上の応募があったと考えられます。選考委員会では、1次審査、そして2次審査をへて23編を選入として、最優秀賞1編、優秀賞2編を選考いたしました。どの作文もすばらしく、入選作品を絞ることも、さらに最優秀賞、優秀賞を決定するにも大変苦労しました。

今年度の作文の内容では、とくに職場体験学習から、働くことの大切さや喜びを体験したことで、将来の目標や今やるべきことがわかったなどの作文が多く、体験する大切さが生徒に大きな影響を及ぼすことを痛感しました。

今回、最優秀賞を受賞した山浦理桜さんの「働いて得たエネルギー」は職場体験学習で介護施設の利用者の方から「あなたの笑顔を見るとうれしくなる」という言葉をかけていただきうれしかったこと。また、親戚の畑でジャガイモの収穫を手伝った時に「戦力になるよ」と言われるとずっと頑張ろうと思ったこと。その時に「働くことは自分が相手に与えるだけでなく、相手からもエネルギーをもらえるのだ」と気付

いたと表現しています。優秀賞の小野寺柊人君の「完成の先」では技術・家庭科の授業で製作したラジオが完成し、スイッチを入れランプが付き音が聞こえた時の感動。家族のみんなが誉めてくれたことは完成したときよりもうれしかった。さらに祖父がそのラジオを使ってくれた時「自分が作った物が誰かの役に立っている」ことの感動。生物育成で育てたピーマンをおいしいと言って食べてくれた時の達成感。家庭科で学習した「豚のシウウガ焼き」を家族に作ったら「おいしい。また作ってね。」と言ってくれた時のうれしい気持ち。この経験から将来は「人に喜んでもらえる仕事」につきたいと目標が決まったことを表現しています。もう一人の優秀賞竹垣李莉花さんの「私にとってのものづくり」は将来の夢「装丁家」にどうすればなれるかを調べるうちに、自分が作った物で人が喜んでくれることで達成感が味わえると気がつき、技術の授業でCDラックを作成。完成したCDラックを弟が今でも使ってくれていることから、物を作ることの楽しさ、喜びを知り、物を作る側で頑張りたいと表現しています。

人が一番ドーパミンを多く発生する時は、人に何かを与えて自分で満足する時よりも、その人から「ありがとう」と感謝された時に、一番ドーパミンが発生する、言い換えれば一番幸福な気持ちになる時です。

職場体験学習で仕事をした時の感謝の言葉、技術・家庭科で作品を作って、その作品を誉めてくれた、使ってくれて役に立ったと言ってくれた。その時の気持ちやどの作文にも溢れていました。是非、これからも多くの体験をし、うれしい、誇らしい気持ちを味わってほしいと願っています。

最後に今回の「作文コンクール」に応募していただいた多くの生徒のみなさんありがとうございました。また、ご指導いただいた先生方、貴重な体験をさせていただいた地域、事業所の皆様、温かく見守ってくださった保護者の皆様に感謝申し上げます。

作文選考をおして

高等学校・専修学校の部 選考委員長

齋藤義弘



今年度は、高等学校の部に百十五作品、専修学校の部に二十作品の応募がありました。一次審査、二次審査を経て、高等学校の部では、最優秀賞一作品、優秀賞三作品、佳作十四作品、専修学校の部では、最優秀賞一作品、優秀賞一作品、佳作二作品を決定させていただきました。

高等学校の部の最優秀賞は、愛国高等学校三年隈部愛さんの作品で、題名は「決意」です。

「無機質な廊下」から始まる作品で、お祖父さんの病状に医師から説明があるとのこと、親戚全員が病院に集まったところから、内容が展開していきます。祖父の急激な症状の悪化を受け入れることのできない自分、「ぜえぜえ」という呼吸音が見られたので病院を受診するよう勧めた自分、「成人実習」の実習中であつたために祖父と同様の患者を見るたびに患者の姿が祖父と重なってしまうこと。祖父母を自分自身で介護してあげたいという理由で看護師を目指した自分。

看護師になった姿を見せてあげることはできませんでしたが、「立派な看護師になる」と祖父の告別式で誓いました。この決意が、選考委員にとっても強く伝わる作品でした。

専修学校の部の最優秀賞は、東京エアトラベル・ホテル専門学校二年大津紗理依さんの作品で、題名は「授業を通して学んだこと」です。

専門学校に入学してから「手話」という新しい言語を学んでいるから始まり、目標は、「手話」という言語を活用して、歌を覚え披露することであると結んでいます。

アルバイト先のテーマパークで、耳が不自由な六歳の女の子に、手話で「おめでとう」と伝えました。女の子は、笑いながら涙を流しました。大津さんにとっては、女の子の綺麗なうれし涙を見たのは初めての経験でした。この時、初めて「手話」も言語であることに気づきました。

専門学校に入学して良かったこと、それは「様々な場面で習ったことを実践できること」です。「手話を使った歌を覚え披露する。」という目標を達成することを期待しています。

本当に僅かな差でしたが、優秀賞の瑞穂農芸高校の四宮桃さん、田無工業高校の柿原美咲さん、大島海洋国際高校の福田翔太君、東京エアトラベル・ホテル専門学校の秋田真佑さんの作品も、とても立派でした。

一般論だけでなく、経験や体験等に基づいて記述されていたこと、述べている事柄に魅力があり好感が持てたこと、独自の見方・考え方で述べられていたことが印象的でした。

また、佳作に入賞した十六作品についても、どの作品もまとまりがあり、皆さんが言いたいこと、伝えたいこと、そして何よりも専門分野を学ぶことで、皆さん一人一人が着実に成長していることが、理解できる文章でした。

結びに、専門高校、専修学校で学ぶ生徒の皆さんは、自分の興味・関心のあることを専門的に学ぶことにより、将来、自分が進む道を見つけています。今の学びを大切にし、自信と誇りを持ち、目標を必ず叶えることを期待しています。



平成 29 年度 作文コンクール表彰式（中学校の部） 12 月 14 日 東京都産業教育振興会



平成 29 年度 作文コンクール表彰式 (高等学校・専修学校の部) 12 月 14 日 東京都産業教育振興会

中学校の部 最優秀賞

働いて得たエネルギー

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

山浦 理桜

人は、何の目的で働いているのか。自分のため、家族、社会のため……。働く意味は一人一人違うのだと思う。しかし、どの職業、どの仕事であっても、必ず人の支えになっていると私は考える。働くことで、みんなの助けになり、喜んでもらえる。すると、働く側も嬉しくなり、もっと働こうと思う。その積み重ねで、今の社会が成り立っているのではないか。これらを強く実感できたのが、職場体験と、夏休み田舎での手伝いだった。

七月中旬の三日間、私は江古田の介護施設を職場として働いた。体験前は介護の仕事は大変そうだというイメージを抱いていた。なぜなら、テレビなどで、車いすを動かしたり、体をふいたり、利用者の方を支えたりといった作業をよく目にしてきたからだ。しかし、実際は知識も経験もない私達にできることは限られていた。専門的な仕事は職員の方が担当し、私達は、利用者の方とのコミュニケーションをとるといふ仕事を主に任された。職場は、基本的に、お年寄りの方が対象だ。一人ずつの個室ではなく、大きな机を囲んでみんなですわり、同じ空間で一緒に時間を過ごすというスタイルだっ

た。家だとあまり動かずに一日を過ごしてしまう方も多い。だが、大勢ならばゲームや歌などのレクリエーションを通して充実した時間を楽しむことができる。まるで、親せきが集まっているような穏やかな雰囲気だった。

人と話すことが好きな私は、会話することなら簡単だと思いい込んでいた。ところが、そう上手くはいかなかった。どう話しかけようか、話をつなぐにはどうしたら良いのか、最初は苦戦の連続だった。天気の話や自己紹介から話題を見つけ、積極的に話を広げていった。だんだん慣れて、昔の暮らしの様子や、お仕事、ご家族についての詳しい話も伺うことができた。いろいろな人と話をした中で、心に残った話がある。

有田さんという男性が話してくれた昔の戦争体験だ。戦時中、相手軍の偵察のために、飛行機に乗ってシंगाポールの方まで行ってきたという。運よく敵とも遭遇せず、帰りの燃料もあったため、無事に生きて帰れたそうだ。

「今、命があるのは幸運なこと、二度とあんな怖い思いはしたくない。」



中学校の部 最優秀賞 山浦 理桜さん

と語られていた。戦争を体験していない私にとって戦争は、遠い昔に起こった悲しい出来事のように思っていた。けれども、実際に体験した人の生の話を聞いたことで、より身近なものに感じる事ができた。このような貴重な体験談を聞いたことは、働いて得られたものの一つだと思う。

また、利用者の方と接するうちに、徐々にうちとけていき、距離も近づいていくように思えた。そして、時折「ありがとう」と言われたり、笑顔を返してくれたりした。

「あなたの笑顔を見ると、とっても嬉しくなる。」

と言われた時には、頑張って働いてよかったと、やりがいを感じた。職員の方に話を聞いてみると、私と同じように「利用者の方から笑顔を返してもらえると嬉しい」とおっしゃっていた。また、「自分自身が元気で楽しくいることが一番そうでないと、お年寄りに元気を与えることはできない」とも教えられた。確かにその通りだと思った。

今回の職場体験は、三日間という短い期間だったが、本当にたくさんのお話を学べた。介護という仕事において、コミュニケーションはとても重要なことだということ。働くことは、人に一方的に与えるだけでなく、人から得られるものも数多くあるということ。自分が元気が第一だということ……。今までにない経験ができ、実りのある三日間であったと思う。

もう一つ、「働く」という体験として、夏休みに曾祖母の家で手伝った作業がある。そこは長野の田舎の家で、目の前に畑と竹やぶがある。私は親せきの大人やいとこ達と一緒に、ジャガイモを掘ったり竹を燃やしたりした。涼しい長野でも太陽が照りつける中、汗を流しながらのジャガイモの収穫作

業や、火の中に竹を投げ込む作業は、体力を使う重労働だ。それに、お金がもらえるわけでもない。しかし、みんなが苦勞を分かち合いながら、一生懸命働けば、達成感が得られる。慣れてくると自然と腕も上達し、自信もついてくる。作業後の一杯の麦茶は、とてつもなく美味しく思える。大人たちから、「戦力になるね」「いっぱい働いてくれて助かった」などのお礼の言葉をかけられると、やってよかったという気持ちになる。

働く上で、お金を稼ぐことは目的の一つで、たくさんもらえれば、やはり嬉しいだろう。だが、お金以上に感謝の言葉はエネルギーになるのではないだろうか。この体験ではそういうものを感じられたのだった。

私はまだ十四歳で、働く社会人ではない。けれども、二つの仕事の体験を通して、少しではあるが、仕事の大変さ、楽しさ、そして何よりも人からの言葉が力になるということを知った。自分がされて嬉しかったことは、きっと他の人も嬉しいはずだ。日頃から、働いている人へ、感謝の気持ちを忘れないこと、それを伝えていくことであれば、今からでもできる。働くようになるまでは、そうすることから、社会への責任を果たす第一歩を踏み出したい。

中学校の部 優秀賞

私にとつとの「ものづくり」

新宿区立西早稲田中学校 三年

竹 垣 李莉花

私の将来の夢は、装丁家と呼ばれる職業に就くことです。装丁家と言うのは、出版される書籍の表紙や扉、帯、使う紙などをデザイン、指定する人のことで、本の売上にも影響する大事な役割を持っています。

私は、小説やマンガを読むことが好きで、よく表紙を見て、読む本を選びます。もちろん、元々好きだった作家さんだから買うこともあります。棚に並んでいたときに目に付いた本を手にとることが多いです。そうしたときに、目に付く本には、雰囲気が好きだなとか、面白そうだな、と思わせる表紙や、あおり文が書かれている帯があることに気がきました。

装丁と言うものに興味を持ち、私が持っている本は誰がデザインしているのだろう、と疑問に思い、調べてみると、同じ名前を見かけることがありました。

その方が手がけた表紙を見ると、不思議と幸せな気持ちでいっぱいになりました。まだ飛び込んでいない本の世界を、表紙を眺めることで想像してみたり、本の魅力を増幅させる紙質の表紙、帯のデザインにも目を向けてみると、わく

わくし、胸が高鳴ります。そう繰り返している内に、私もこの人のように、人をこんなにも惹き付ける本を作ってみたいと思うようになりました。

表紙は、読者と本を引き合わせるための大切な部分。それをデザインする装丁家は、想像や表現力、デザインに関する知識など、多くのものを身に付け、それらを形にしなければなりません。その為、日頃から周りのものを見て、感じて、考える行為が必要不可欠です。ですが、これらは私が苦手とするものでもありました。

私は、技術や美術、国語もそうですが、自分の考えや伝えたいことを、作品や、文章で表現することが大の苦手です。見本がなければ、上手く出来ず、その見本を見たとしても、真似ているものとして受け取ってしまい、納得のいくものを作り出せた経験がありません。頭では思い浮かぶのに、いざ形にしてみると、思うようにならないことに、もどかしさや、苛つきさえ覚えます。

そう思うことがありますが、私は「ものづくり」が好きなのだと思えます。その理由として、何かを作り、完成したときに達成感を味わえること、自分の表現したいものが形になること、もう一つは、自分が作ったものに対して他の人が喜んでくれることがあるからです。

中学一年生の技術の授業で、私は木材を使ったCDラックを作りました。木材の切断から、完成まで、先生の力を借りることはあったものの、一つの作品を作り出すことが出来ました。切断面がガタガタだったり、完璧に磨きあがっていなかったり、売られているものとは程遠い出来上がりでした。

ですが、CDラックを家に持ち帰ったとき、弟が

「作ったの？凄いいね、使ってもいい？」

と言ってくれました。そして、今でも使ってくれています。あのとき、弟がそう言ってくれたのがとても嬉しかったことを今でも覚えています。

出来上がりがどうであれ、ものを作ることの楽しさ、喜びを知った気がしました。ものを作る側、作られたものを手に取る側、どちらの気持ちも味わってみて、より作る側にいてみたいと思うようになりました。

現在、出版業界は不況となっています。書籍類の電子化や、需要率の低下など、多くの原因が挙げられます。決して良いとは言えない業界の中で、満足に仕事ができるのはほんのひと握りでしょう。私は、人を惹き付ける本を作り、多くの人に見てもらいたいです。その為に、デザインの基礎はもちろん、私に足りない力を補う必要があります。また、様々な分野に目を向け、次世代にも対応できるようにしていきたいです。

皆さんにとって、「ものづくり」とはどんな存在でしょうか。私は、自分の作ったもので人が楽しんでくれたり、生活を豊かにしたりと、「ものづくり」の大切な部分に気付くことが出来たと思います。人を喜ばせることができる、それが私にとっての「ものづくり」です。



完成の先

東村山市立東村山第四中学校 三年

小野寺 柊 人

僕は、技術・家庭科（技術分野）の授業が好きだ。実技の時間が多く、生活に役立つ様々なことを学び、体験できるからだ。CDボックスや本立て、ラジオなど色々なものをつくってきたが、どれも楽しかった。特に印象に残っているのは、ラジオ製作だ。途中で、はんだづけがうまくできずイモはんだになるばかりで、とても苦労したのを覚えている。しかし、経験を積むうちに少しずつ上達していくのを実感することができた。そうなる今度は、作業するのが楽しくなってきた。毎週の技術分野の授業がとても楽しみだった。

完成したときは、嬉しかった。音が鳴るかどうか恐る恐るスイッチを入れてみると、ちゃんと電源ランプが赤く点灯し、音が聞こえてきた。

「やった！完成した！」

自分でラジオをつくれたことに感動した。

家に持ち帰り、弟に見せると、

「すごい。本当に自分でつくったの？」

と、驚いていた。家族のみんなにも、

「すごいね。よくできてるね。」

と、ほめられた。完成したときよりも、もっと嬉しかった。

頑張って完成させたラジオだったが、その後、特に使われることもなく机の上に放置されていた。しかし、そのラジオが活躍するときにやってきた。福島に住む祖父母が一ヶ月間、僕の家に滞在することになった。

祖父は、野球観戦が大好きで、いつもテレビを見ているが、眠くなると、布団に横になり、ラジオで中継を聴いている。

「ラジオある？」

と聞かれ、ぱっと僕の作ったラジオを思い出し祖父に渡した。手づくりのラジオに祖父はとても喜んでくれた。そして、滞在期間中ずっと枕元に置き毎日大切に使ってくれた。

自分のつくったものが、誰かの役に立ち、喜んでもらえていることが、ただただ単純に嬉しかった。

また、技術分野の授業の中で学んだ材料と加工での鑄造作品の製作は、とても興味深かった。鑄造は実習前から気になっていた技法だった。溶けている低融合金を見るのも初めてであり、液体状になっていることを間近で見えて驚いた。そして、それを自分の好きなデザインに設計した鑄型に鑄込み、仕上げるという作業は僕にとっては、初めての体験ばかりだった。世界でたったひとつだけのオリジナルの作品が完成したときは、やっぱりものづくりは楽しいなと改めて思った。

思えば、生物育成では自分で栽培したピーマンを使って味噌野菜炒めを家族につくってあげたときも喜んでくれる姿が嬉しかった。自分が毎日のように水をあげて育てたピーマンを美味しく食べてもらったときの嬉しい気持ちと達成感は、今も忘れていない。

家族みんなが、

「美味しいね。」

「上手にできているね。」

と喜んで食べてくれたので、またつくってあげたいと思った。家庭科で教わった豚のしょうが焼きを家族につくってあげたときも家族の反応が好評で嬉しい気持ちでいっぱいになった。

人の役に立つことや喜んでもらえることはとても嬉しいことだ。そして、それは、また頑張ろうという気持ちにさせてくれる。

自分には、まだ具体的な将来の夢はないけれど、人の役に立ち、人に喜んでもらえるような仕事に就きたいと思っている。ラジオの一つ一つの小さな部品のように、陰ながら人の暮らしを支える仕事もある。ものづくりは人を笑顔にすることができ、人と人をつなぐコミュニケーションのきっかけにもなることを体験を通して実感することができた。これからもたくさんのことを学び、何ごとにも興味をもち、積極的に取り組んでいきたい。

中学校の部 佳作

生活を支えてくれる機械

中央区立佃中学校 二年

尾形 慎

去年、学校の技術の授業で大根を栽培しました。種まきから始め、3本が発芽し、無事に2本が成長しました。しかし、アブラムシやイモムシなどの害虫が多く、葉っぱを食べられてしまい、あまり立派な大根はできませんでした。そのときは、無事に収穫できた喜びが大きく、うれしい気持ちになりました。けれども、家の野菜室にあったお店で買ってきた大根は、太さが段違いで重さもズッシリとしていて、とにかく重いです。自分が作った大根は細く見え、その違いにびっくりしたことを鮮明に覚えています。

スーパーでは、当たり前のように真っ白で太い立派な大根がいつも売られています。これは、土の中に植えられていた大根が引き抜かれて土も洗い流しきれいにし、産地から出荷され東京まで大量に運ばれてきているのだと思います。私達は、このスーパーできれいになっている立派な野菜を常に買うことができます。自分が授業で大根を育ててみて分かったことですが、大根が収穫できるまでに思っていたより日数がかかりました。大雨で、土が流されてしまったり、風で大根の葉が折れてしまうことはありませんでした。アブラムシ

などが葉にたくさん付き、気付いて何回か取り除こうとしたのですが、全ては取り除くことはできませんでした。また、毎日世話をすることはできなかったもので、土日に晴れが続いて土がからからに乾いてしまうこともありました。これも、自分の育てた大根が良く成長しなかった原因の一つかもしれません。商品になっている大根は、水やりや肥料、虫対策などを経てたくさんの苦労があったからこそ、立派な大根に成長させることができたのだと思います。

僕は、夏休みになると家族と海水浴に行きます。海岸に向かう道の両側は、広大な畑が広がっています。これまで、海のことや海岸までの途中にいるバッタなどの虫に目がいき、あまり畑には目が向いていませんでした。しかし今年、両側の畑を見ていると、農作業用の色々な機械が畑の中で、大きな役割を果たしていることに気付きました。道の両側の畑はかなりの距離に渡ってたくさんの野菜が栽培されていて、その広大な敷地で作業をするための色々な機械が存在し、農作業をしている人を助けてくれています。僕が見て感動したのは、一本一本苗を植える機械がその苗を植えたあとに、金属のアームのようなものができて、植えた後の土を固めるような作業をしていたことです。また、大きなタ



イヤで畑の中に入り、うねを作る機械など今までにも見ていたかもしれないが、今回はこれらの畑にある機械が農作物を育てたり収穫していくうえでどのように使われているかが、少しイメージすることができました。広大な敷地で大量の収穫や植え付けをすることは、人間が一人や二人では、とてもできないと思うので、このような機械は本場に重要だと思いました。今、僕達が授業で習っている、ロボット作りは、とても楽しいものです。また、実際の生活で物を動かしたり、力を加えることができるような機械ができると、こんなに人間の生活を支えてくれるような作業をしてくれるのだ、ということを実感することができました。同じことを何度もうくり返す作業や、お年寄りには重すぎて負担になってしまう作業は、機械の得意なことだと思いました。これから、日本が迎える本格的な高齢化社会において、お年寄りに役立つ機械はますます必要になると思います。

物づくりから学ぶこと

中央区立佃中学校 二年

小林 大 輔

今まで、物づくりをするのはいつも学校の授業や家庭科の授業でした。授業では、ただ物を作るということではなく、なぜ必要なのか、なぜその道具を使うのか、なぜ工夫をする

のか、ということを学ぶことができます。

材料や道具にもたくさんの種類があり、目的に適したものを選んでいくということも教えてもらいました。

改めて家の中や身の周りを見渡して、どんな目的のために、どう工夫されているかと思ってみると、ただの本棚も違って見えてきます。

僕が一番印象的だったのは、物を作る際に「使いやすさ」を考える時にただ便利だからという理由で作成していないということです。

社会や環境への配慮、そして経済性の視点からも工夫すると教わりました。

材料を選択することひとつ取っても、入手しやすさや加工しやすさ、重さや強度、経済性など考慮することはたくさんあります。

しかも、自分で作るということは、これらを自分で選択できるといふ楽しさもあります。商品にする時は、使う人のことを考えて作るという気持ちに変わります。制作する時に使う道具も同じで、使う人がどうしたら使いやすいかということからもどんどん進歩しています。

技術の授業で物を作ることによって、物をひとつ作るのに様々な人の手で、それぞれの気持ちがあるのだということがよく分かりました。

そして、技術はこの、「使いやすさ」を追求することによって、ますます進化していくのだと思いました。

技術の授業ではこの他にも、製品技術の進化についても教わりました。例えば、缶コーヒーなどのアルミニウム缶は、

タブというふたが外れないようになっていきます。ゴミが出ないばかりではなく、ふたも一緒にリサイクルできるからです。普段、当たり前のように目にしているものでも様々な工夫があり、環境や人にやさしくという前提でつくられていることがよく分かりました。調べてみると、形の違うペットボトルにも、様々な用途による工夫があるのでとうと推測することもできます。授業で学び、そういう視点で物を見てみると今までとは、違って見えてきます。人間が産業で発展してきたことは、生活の中に当たり前のこととして存在していますが、人間の知恵や配慮によって進化していることに、もっと目を向けるべきだと思います。

そこには、何もマイナス要因がないことにも気づきます。もっと便利に、もっと美しく社会への配慮をしながら作製することが、進歩に伝わっていると思うと、物づくりから教わるのがたくさんあります。「こうなったらいいな」という気持ちや、「こういう物があったら便利」と思うことは、それを実現するための（設計）であり、それをどう工夫しながら理想の形にしていくのかと考えることこそ、より良い環境を作ることにつながっていると感じました。

技術の授業だけではなく、家庭科でも洋服などを作っている時の工夫、料理を完成させる際の工夫などは、同じ物づくりとして共通点はたくさんあります。家庭科では特に、順序が大事だということも学びました。

近代では便利な道具がたくさんありますが、昔の人は限られた資源や道具で、様々な知恵を活かしていったのだということから、工夫はアイデアなのだということが学びました。

将来、自分がどのような職業に就くのか分かりませんが、相手がもっとやりやすくなるにはということを考えたり、仕事を効率良くするためにはどう工夫すればということを考え、自分を向上させ、周りの環境も良くなっていくのではないかと思います。

つらいけどやりがいがある

墨田区立吾嬭立花中学校 三年

大田 睦 紬

私は、父がマッサージ師ということもあったのか、それに憧れ将来は父と同じ道に進みたいと思っています。理由としては、自分の手で悪い所を治し、人が笑顔になっていくのを見たいからです。しかし、親や祖父母には反対されなかったのですが、叔父に、

「コミュニケーションを取らないと、自分のお店を開いても人がこないよ。」

と言われました。ドキリとしました。少し人と話すのが苦手だからです。叔父に何回も言われ、諦めた方が良さののだろうか、悩んでいました。その時、学校で職場体験が行われることになり、マッサージの分野はなかったのですが、福祉も少し興味があったので、老人ホームの体験に参加しました。

私は職場体験で、いろんなことを学びました。

一つめは、笑顔でいることです。目線を同じ位置で話し何より笑顔でいることは、できそうにないと思っていました。しかし、高齢者の方々が、たくさん話しかけてくださったので、自然に会話もでき、洗濯物を一緒にたたむ作業など、とても楽しく笑顔で過ごせました。

二つめは、衛生面をきれいに保つことです。老人ホームは、入って必ず体温を測り、マスク装着を義務付けられていました。私は、高齢者の方々が少しでも快適に過ごしてほしいという思いから、衛生面を徹底しているのかと思いました。

三つめは、命の重さが手に乗った時です。三日目の最終日にクリスマス会に招待されたので、会場まで同行しました。その時、一人で車いすを押すので、スロープを下る時、凄く命の重さが手に乗った気がしました。私は一人の命を預かっているのだと感じさせられました。

職場体験では、とてもやりがいを感じる仕事ばかりでした。働いている方々に「つらいことはなんですか。」と聞くとみなさんは、

「つらいけど、やりがいのある仕事だし、自分が就きたかった職場だから。」

と口をそろえて答えてくれました。その言葉は、凄く心に刺さりました。その時、私は、実現するまで簡単に諦めてはいけないし、その



夢に向かって日々がんばっていきこうという気持ちになりました。

働くということは何かと考えた時、私は、お金を稼ぐことではと、思っていました。しかし、職場体験を終えて、もう一度考えてみると「つらいけど、やりがいがある」ということで、人のために働く喜びがあるのかなと思えました。どんなに、つらい仕事だとしても、自分が就きたくて努力したことを忘れず、やりがいを感じながら、元気に働けることが、ありがたいと思えるようになります。

マッサージ師という職は、国家資格です。そう簡単になれるものではないとわかってはいるけれど、私が凄くやりたい、この職に就きたいという気持ちが一番強いのは、マッサージ師だけです。途中、なにかがきっかけで、違う夢に変わったとしても、その夢に向かって希望をもってがんばりたいという気持ちは忘れません。そのためには、自分が苦手なことを克服できるようにします。

まず一つめは、コミュニケーションを少しずつとれるようにしていくことです。コミュニケーションをとったら、お互いのことがわかり、相手も自分もどう思っているのか知ることができます。だから、相手とたくさん会話ができるようになります。

二つめは、少しでも自分が主張できるようにすることです。あまり、授業で発言することがないので、自分ができるペースでゆっくりと確実にがんばりたいです。そのために、小さな一歩として、あまり、話したことがない友達と話したりして、自分の主張を言うことです。

三つめは、思いやり精神です。思いやることもっとたくさんできれば、人も自然と集まってくると思うからです。そのため、相手を気遣ってあげたり、いつも笑顔で接することが大切です。

この三つは、社会にでて最も必要とされるものだと思います。この三つをできるようにになりたいです。

私は、日々、支えてくれている方々に感謝の気持ちでいっぱいです。そして、何気なく口に行っている感謝の気持ちを、当たり前だと思うのではなくて、やってくれたことに「ありがとう」としっかり口にしていきたいです。なぜなら、言葉に出して、はじめて相手が受け取ってくれると思うからです。

職場体験を通して学んだこと

品川区立日野学園 八年

高 松 慶

今年の七月、僕は学校の行事で、二日間の職場体験に参加した。自分が興味を持った職場を選択できたので、僕はコンビニを希望した。なぜ選んだのかというと、日頃からよく利用していて、なじみがあるからだ。また、実際に店員の人たちが、どのように働いているのか興味があった。

初日、店員さんと同じ制服に着替えると、身が引き締まる思いがした。お客さんから見ると、僕たちも店の一員として

見られるのかと思うと緊張した。「いらっしやいませ。」の声もなかなか大きく出せなかった。

最初に、仕事内容の説明、次にお客様に対する心構えなどを教えてもらった。僕たちが任せてもらった仕事は、食品や飲み物、タバコなどの商品を補充することだ。

食品の補充は、店の奥にある部屋の棚から補充が必要な商品の入ったケースを取り出し、台車に乗せて店内に運び、棚に並べるという手順だ。一見簡単そうだが、僕が実習に行った店は、商品の棚と棚との間隔がとても狭く、お客様の買い物邪魔にならないように移動するのがとても難しかった。

タバコの補充では、レジのそばにある棚と、店の奥の部屋にあるタバコ専用ロッカーの両方に並べるという作業をした。同じ銘柄のものを探し、並べるのが意外に難しかった。でも、繰り返しやっているうちに、どこにどの商品があるのかを自然に身体が覚えていったので、最後にはスムーズにできるようになり、達成感を味わうことができた。

飲み物の補充では、とても貴重な体験をさせていただいた。それは、飲み物を売っている冷蔵庫の裏側に入って、補充をするという作業だ。普段は絶対に入ることがないので、緊張したと同時にわくわくした。もちろん飲み物の冷蔵庫なので、とても寒く、何が足りないのかを素早く判断し、補充しなければならぬところが大変だった。

そして特に心に残っているのは、お店の方から教えてもらった、お客様に対する心構えについての話だ。お店側が日頃から気を付けていることは、挨拶はもちろんのこと、まずお客様優先という意識を持つことだそう。店の裏にある部

屋の壁に、「接客上八大用語」や「誓いの言葉」というものが貼ってあり、これを毎朝、そして仕事の切り替えのたびに読むのだそうだ。言葉を口に出すことによりしっかりと意識できるとなるのだと思う。

この職場を体験する前は、僕は、コンビニの仕事というところ、まずレジ打ちという印象を持っていた。しかし実際は、商品の補充や入れ替え、業者さんへの対応など、数多くの仕事があることが分かった。毎日、昼の混雑した時間帯には、一人で七十人くらいのお客様のレジを担当するそうだ。たくさんある仕事を手際よく、店が混んでいない時間帯に片付けることの大切さも学ぶことができた。

コンビニは豊富な品揃え、魅力的な新商品、また銀行のATMがあったり、色々なチケットが購入できたり、宅配便も出せるなど、本当に便利なところだ。今までは客の立場で店に入り、買い物などをしてきたが、職場体験をしてみて、今まで知らなかったお店側の日々の努力や、店員さんの気遣いや工夫が分かるようになった。お客様に対する店員さんの気持ちを理解できた今は、お店に立った時、笑顔で、大きな声で「いらっしゃいませ。」「ありがとうございます。」とさえそうだ。

この夏休みに、大学三年生のいとこが、インターンシップという、三週間位、本格的に企業で働く経験をすると言っていた。今回、僕は二日間職場を経験しただけなので、もしまた機会があったら、今度はもっと長い期間どこかの企業で実際に働いてみたい。インターンシップを経験した、いとこの話も聞いてみようと思う。

この職場体験は、僕にとって、将来どんな仕事が自分に向いているのか、自分がどんな仕事をしたいのか、考えるきっかけになった。僕は自分の手で色々なものを作るのが好きなので、ものづくりに関係する仕事をしたいと思っているが、どんな仕事に就くとしても、お客様に最高のサービスを提供するための心構えは大切になると思う。相手の立場になって考えること、笑顔でいること、大きな声でハキハキと挨拶をすることは、普段の生活の中でもできるので、心がけていきたいと思う。

ものづくりの “最適化”

大田区立大森第一中学校 一年

河野 凜

「まあ、百円だし、いいかつ…。」

三月までは、そう思っていた。それが、

「価格よりも、相手を思う製品の方がずっと価値がある。」と思うようになったのは、十二一年間のものづくりを通してだ。中学校の技術の授業で “ウサギのペン立て” をつくったとき、技術の先生が言った。

「切断に失敗しても、切削することで設計図通りの作品になるよ。そのための切りしろだからね。」

これは、のこぎりびきが苦手な人やものづくりが嫌いな人

に向けて、失敗しても大丈夫だよという気持ちで言ってくれたのだと思った。そして、この言葉を聞くまでは、私もものづくりが嫌いだった。

小学校の図工で、“ペン立て”をつくった。私はペンをたくさん持っていたので、それをすべて収納できるように、少し大きめのペン立てをつくることにした。最初の作業は、えんぴつで線をかくことだった。技術の授業では、“けがき”という作業だと習った。この作業は順調で、その次にやるのこぎりで切断する作業にも、特に問題を感じていなかった。しかし、自分がかいた線の上を真っすぐに切ろうと思って、私にはのこぎりを上手く使いこなせなかった。そのため、イメージ通りのペン立てをつくることができなかった。この失敗が、私がものづくりを嫌いになるきっかけをつくった。

中学校に入学し、図工が技術になった。設計図をかいいたり、切りしろをつくって作業を行うので、失敗が減ったような気がする。切りしろがあることで、切断などの作業への安心感が生まれ、その安心感がものづくりを好きにさせてくれた。安心感が生まれたことによって、ものづくりの“最適化”について考えることが増えた。

その一つが、使う場面を考えること。例えば、イスだ。理科室や技術室、家庭科室のイスは実験や作業の安全面が重視されている。背もたれがない分、リラックスして座ることはできないが、危機的状況ではすぐに逃げやすい構造になっている。逆に、我が家のソファはリラックスしやすいように背もたれがあり、また座った人を包み込むようにふかふかの素材でできている。さらに、入学式で座った折りたたみ式の

パイプ椅子は、行事のときにだけ使うので、収納しやすい構造になっている。同じイスでも、使う場面によって工夫されていることに気付いた。背もたれがあって、安全で、折りたたみができて、安価なものがあれば理想なのかもしれないが、使う場面に応じて、最適な構造を選択したもののづくりが、世の中では行われている。

二つめは、ユニバーサルデザインについてだ。シャンプーやリンスの容器には、触ただけでどちらの容器かわかるように工夫されている。視覚障がい者だけでなく、実際に使用する場面に起こりうる状況を設定したデザインなのだ。バリアフリーといって特定の人間向けのデザインであるよりも、誰でも使いやすい構造を追求することが、ものづくりの“最適化”なのかもしれない。

そして、私が一番大切にしたいことは、相手のことを思うものづくりだ。母のための、手作りのティッシュカバーをプレゼントしたことがある。母が好きな色や形などを選んでつくった。そして、感謝の言葉を手紙にして、ティッシュカバーに添えた。母はとても喜んでくれた。使用する相手の



身になってデザインや素材を工夫したり、また、どんな想いを込めたのかわかるようにすることで、きつと長く使いたいと思ってくれるような気がする。そして、何より、相手があることで、よりていねいにつくろうという気持ちになり、いつも以上により作品が完成したと思っている。

私は、三月末に東京に引っ越してきた。引っ越し準備のときに、たくさんいらぬものを処分した。その多くは、安価な製品が多かった。購入するときは、安価さに惹かれ、デザインや使い勝手の検討をいいかげんにしていたのだ。本当に必要かどうかを考えていなかった。

“ものづくりの最適化”とは、結局、使う相手に長く使い続けてもらうためにはどんな設計をすればよいかを考えることなのかもしれない。私も3年掛けて、そんな製品をつくりたい。

製作者でなければ気付かなかったこと

大田区立大森第一中学校 一年

横 尾 祐 乃

知っているのと、やってみるのには大きな違いがある。

小学校六年生のときに、中学校の授業体験があった。そのときに初めて技術の授業を受けた。体験する前は、図工の延長かなと思っていた。いざ授業を受けてみると、コンピュー

タを使って構想図をかき、その構想図をもとに実際につくるのだと説明され、技術のイメージが変わった。入学前から私は知っていた。技術の授業では、どのようなことを学習するのかを。しかし、中学校入学後の授業を受けて、さらにイメージが変わった。なぜなら、構想図をかき、それをもとにつくるだけでなく、消費者や製作者について考えながらつくらなければ、製品としての価値がなくなってしまうと、授業を通して気付いたからだ。入学してすぐにつくり始めた“ウサギのペン立て”、すごく簡単な構造のはずが、いまだに完成していないのは、そういった基本的なことを学びながらつくっているからだ。消費者としては、品質のよいものや使いやすいもの、値段が安いものを購入したいと思う。ただ、品質のよさと使いやすさを追求した商品が安く売られているということはあまりない。だから製作者は、品質のよさ、使いやすさをよく考え、商品価格を設定しなければならない。

“ウサギのペン立て”は三つの材料からできている。環境に配慮し間伐材を用い、廃棄することも考えて分解しやすい構造になっている。なぜ、入学したばかりの私たちがこまで考えた材料選び、そして構造の工夫ができたのかと言えば、技術の先生が考えた設計図にもとづいてつくっているからだ。この課題で私たちは基本的な加工方法を学び、最終的には自分や家族の家庭生活を支える製品を設計、製作するのだ。設計図を見たときは魅力的なペン立てに見え、完成したら使うのが楽しみだなあと思っていた。つくる前から私は知っていた。完成したら自分が使うのだということを。ただ、自分が持っているペンのすべてが収納できないこと、使用する場所のぴつ

たりサイズではないこと、こういったことに気付いたのは、完成が近づいてきてからだ。もし私が購入する立場だったら、この製品にいくら出すだろうか。どこを改良すれば、もっとほしい製品になるだろうか。

その答えもまた、技術の授業を通して知った。バリアフリーデザインやユニバーサルデザイン、環境保全につとめた製品も、そして安全面を意識した製品。こういった製品が、消費者が喜ぶ製品だ。

この経験が家庭科の授業への考え方にもつながっている。材料になる布選びだけでなく、手縫いなのか、ミシンで縫うのか、その違いによって品質に差が出る。結果、どういう場面で使用するかも変わってくる。

消費者と製作者の立場を踏まえてものづくりをすることは難しいと知っているようで、本質的な部分を理解していなかったのだと、技術・家庭科の授業が教えてくれた。そういう思考をきっかけに、考えたり、作ったりするのは難しいけれど、誰かのためのものづくりや誰かのために行動するのは、とても気持ちがいいものだと強く思うようになった。

私は今、人のために何かしたいという思いから、校内でのボランティア活動に参加している。誰かのために何かするのは、された側にとって嬉しいことだと知っていた。そして、実際に行動してみても気付いたのは、ボランティアしている方も嬉しいということ。いずれは、地域のために貢献したいという思いがある。行動を起こすのには勇気があるが、公園のゴミ拾いなら、自分にもできそう。公園には心無い人によって捨てられたゴミがたくさん落ちていることを、私は知って

いた。ただ、実際に拾おうと思ったときに、そのゴミを捨てるためのゴミ箱が少ないということに気付いた。ここで思うのは、ゴミ箱をたくさん設置すれば、ポイ捨ても減るのではないかということ。ただ、そうすると公園の清掃員の方の間が増えることになる。では、どんなゴミ箱を、どこに、どれくらい設置するのが、一番良い状態なのかと考えるようになった。

“ものづくり”だけではなく、社会生活の多くの場面で「知っている」とおごるのではなく、何でもやってみることで自分自身が変わる気がする。

私の未来図

渋谷区立鉢山中学校 三年

山口 るりか

将来やりたいことはあるの。私はよくこのような質問をされる。特にやりたい事はなくても答えに困っていた。しかし最近どうしてもなりたいた職業を見つけた。それは、中学校の理科の先生だ。

私は理科が好きだ。私は小学校のころ友達がとても少なく一人でいることが多かった。そんな時私はある一冊の本と出会った。それは植物図鑑だ。初めは写真集の感覚でパラパラとめくっているだけだった。しかし道に咲いている花を見つ



けるとその花の名前を調べて歩く事が楽しく、いつの間にかそんな遊びをするようになっていた。

ある日の理科の授業でホウセンカと百日草を植えるという授業があった。日が経つにつれ大きくなっていく植物が不思議で仕方なかった。水だけでどうして花が咲くのか、これが私と理科の出会いだ。当時の小学校の先生は私に生き物係をまかせてくださった。教室にはザリガニやどじょう、金魚など色々な生き物がいた。一匹一匹人間とは違う性質をもつ生物たちに興味津々だった。そして生き物係をやっている中で私はたくさん生物と接し、たくさんのおかげ、どうして、を見つけた。でも、小学生では理解できないことも多く、中学校に希望を持つようになっていった。

中学校に入り、私はすばらしい先生に出会った。その先生は私達生徒のなぜ、どうしてをととても大切にしてくれる先生だ。どんな質問も納得するまで教えてくれるそんな先生のおかげで私にとって理科はかけがえのないものになっていった。小学校のころのなぜどうしてを中学校の授業で解決することができた。それだけではない、普段の「当り前」を科学の力で説明する楽しさも教えてもらえた。知らないことを知ること

とがとても楽しくて仕方がない。今まで勉強を楽しいなんて感じたことなど一度もなかったのに学ぶことが楽しいと感じるなんて自分でも驚いた。そして私に勉強の楽しさ

を教えてくれた先生へのあこがれが強くなっていった。

塾で自習をしていると友達が分からない問題を教えてほしいと私のところに持ってきた。私は学校の先生に習ったことを思い出しながら一つ一つゆっくりと教えた。うまく説明ができたかはわからないけれどその子は「すごく分かりやすかったよ、ありがとう」と言ってくれた。嬉しかった。人に教えられるような人ではない私がありがとうと感謝されるなんてそれだけでもすごく嬉しかった。

私の学校には理科がキラキラなクラスメイトが多い。何が楽しいのか分からないとよく言われる。でも私はそんなことを言われるのがすごく悔しい。別に私のことを言われているわけではないのに悔しい気持ちでいっぱいになってしまふ。その時、私は理科の先生になってこの子たちのように理科が嫌いな子たちに理科の楽しさを教えてあげたい、と思うようになった。先生のように生徒のなぜ、どうしてを大切に先生になりたい。今の子供は少し冷めている気がする。それは周りの大人が子供のなぜ、どうして、という理科の小さな芽をつみとっているからだと思う。大人になると知らないことより知っていることの方がどうしても多くなる。私は大人になっても忘れない。初めて知ったことに対しての気付き、「なぜ、どうして」から「そうなんだ」に変わるあの瞬間を。きっとだれもが経験していると思う。あの瞬間を感じることができるのはなぜ、どうして、という小さな芽を大切に育てれば育てるほど多くなると思う。だから私のように勉強の楽しさを知らない子供達に一つでも多くあの瞬間を感じさせてあげたい。そして理科が嫌いな子供達を理科が好きな子供に変え

たい。そのために今すべき事は高校に入学するための受験勉強だ。私は理科以外の教科ははっきり言って苦手だ。でも嫌いではない。なぜなら「嫌い」になると、新しく知ることに対しての興味やワクワク感が半減してしまうからだ。私は知らないことを知ることが大好きだ。だからどんな教科も嫌いになりたくない。しかし好きと得意は違うと思う。私はこれから頑張って勉強して、好きな教科を得意な教科に少しずつ変えて、高校に行って大学に行き、理科の先生になるこれが私のやりたいこと。いや、これが私の「未来図」だ。

たくさんの体験から学び得たこと

杉並区立松溪中学校 二年

小林 香穂

私は七月十一日から十四までの四日間、自分の出身保育園で職場体験をさせていただいた。私の将来の夢は、保育士と看護師なのでとても貴重な体験ができて良かった。

私には幼い頃から憧れている一人の先生がいた。そこで、その先生に去年から頼んで職場体験をさせていただくことにした。その先生は今年の四月に実家に戻るため、辞めてしまっていたので、私が知っている先生は一人もいなかったが、たくさんの子どもや先生方などと四日間を過ごして学んだこともたくさんあった。それは、大きく分けて次の二つである。

一つめは、自分が実際に通っていた時には気にもしていなかった先生方の仕事量の多さだ。実際に体験してみないと分からない大変さを、この四日間で体験した。四日間の中で年少、年中、年長の全ての組を体験したが、それぞれ違った大変さだった。年少さんは、人見知りする子やご飯を食べる前から寝てしまう子など、様々な子がいたが、まだ歩けない子がほとんどだったので、行動範囲が狭く走り回らなくてすんだ。しかし全員のオムツ交換を順番にやっていかなくてはいけなくて大変だった。途中で急にオシッコをしてかけられそうにもなった。年中さんは、ある程度の子はオムツを自分で交換することができ、トイレにも行ける子が何人かいたので、年少さんで大変だったオムツ交換は少しの補助ですんだ。しかし、年少さんと違ってみんな走り回るので、追いかけられたりして大変だった。年長さんは、何をするにもほとんど一人でできるので楽だと思っていたが、それとは逆に走り回る子が多く、一緒にお散歩に行った時は、水鉄砲を持っている子たちに追いかけて回され、ビショビショにされた。一人の子がずっと、というわけではなく何人かの子に代わりばんこで追いかけられたので、とても疲れた。

このように、クラスによって違った苦労があった。他にも、子どもたちが寝ている間の仕事としてお散歩時の園児の帽子と職員のTシャツの洗濯、おもちゃの消毒、一人一人の園児ノートに一日の記録を書くこと、行事の前にはその作事用の工作なども陰でやっている。もちろん休憩の時も一斉に休憩ではなく、半分ずつくらいで交代制だった。残っている人は、五分か十分おきに園児がしっかりと呼吸しているかを確認す

る。だから、園児が寝ているからといって楽ではない。

二つめは、男性保育士についてだ。私が実際に通っていた頃は一人もいなかった男性保育士が、今回は一人だけであるが、いた。私はそれを知って驚き、その後調べてみた。その結果、平成十二年には四千六百六十六人だった男性保育士が、平成二十二年には一万三千百六十人と約三倍にも増えていることがわかった。でもなぜ、そんなに男性保育士は増えてきているのか。これもまた、調べてみた。男性保育士が増えている理由として一番に挙げたのは、女子のお母さんとはかく、男子のお母さん方からはとても好評価されていること。また、年長さんくらいの男の子は暴れ回ったりして大変だが、男性保育士だと女性とは違った対処の仕方をしてくれるなどといった、男性保育士への利点があった。その逆で、女子の保護者からは、クレームを言われてしまうこともあるという。しかし、やはりこれからも男性保育士は増え続けていくと予想される。理由は先ほどと同じように、利点の方が大きいということだろう。私は将来保育士になりたいという夢もあるので、これから男性保育士の割合がどうなっていくかも、楽しみである。

今回の職場体験は自分の将来について考えるきっかけにもなったので良かった。

また、思っていた以上に大変な職業だったということを今回の職場体験で実際に体験し、感じたのと同時に、四日間ですべてを知ることができなかったと思うので、もっと調べてこれからの将来につなげていけたら良いと思った。

仕事のやりがい

豊島区立千登世橋中学校 二年

萱 里 笑 花

「子供達が安全に楽しく過ごしているかを見守ることが私達の一番の仕事です。」

これは私が3日間の職場体験でお世話になった幼稚園の先生の言葉です。この言葉は私の考えが大きく変わるきっかけとなりました。

私は、職場体験先が幼稚園だと決まった時すごく嬉しかったです。かわいい子供達と遊ぶだけで楽しそうだなと思っていました。しかし、実際はそうではありませんでした。まず、幼稚園に行くまでの都電が通勤の時間と一緒になくなってしまいとても混んでいました。たくさんの人におしつぶされながら幼稚園に向かいました。私はこの時点でもとても疲れました。毎日こんな人混みの中で職場に行っているなんて、働く人は大変だなと思いました。それと同時にすごいなと尊敬しました。そして、幼稚園に行くともうすでに先生方は忙しそうでした。園児が登園してくるとその忙しさは何倍にもなりました。園児の朝の支度の指導をしたり、園児が遊んでいる時も一瞬たりとも目を離さずに園児の安全を守っていました。さらに、お弁当を食べる時も園児が楽しく食べられるように見守っていました。先生方の昼食の時間はとても短かったです。

私は驚きました。すると先生はこう言いました。

「子供達が安全に楽しく過ごしているかを見守ることが私達の一番の仕事です」と。

私はこれを聞いて反省しました。私は仕事というものを軽く見ていたんだ、何も苦勞しないので仕事をやりとげることばかりなんだ、この仕事には園児を守る責任があるからもっと気を引きしめてやっていかなければならないんだ、と私の考えは大きく変わりました。私は一日目にして働く人たちの苦勞や大変さ、そして働く人たちにはその仕事をするという責任があるということ学びました。

二日目は、園長先生にインタビューをしました。たくさん質問の中で特に印象に残っているのは、

「子供達の笑顔をみること、子供達が成長することがこの仕事のやりがいです。手をぬかずに本気で子供達に指導すること、この仕事のやりがいを感じ、仕事楽しく思えます」という言葉です。私は職場体験一日目ですのに何度も子供達の笑顔をみてきました。しかし、「仕事のやりがい」というのは感じませんでした。それはきっとまだ本気でとりくんでいなかったからだだと思います。私はこの時、仕事に本気で取り組むほど仕事のやりがいを強く感じるができるということに気づきました。そして私も仕事のやりがいを感ぜられるようになりたいと思いました。

三日目は、これまで学んだことを生かしてこの仕事をすることに「責任」をもち、「本気」で取り組みました。園児と遊ぶ時だけでなく、朝の支度をする時、お弁当を食べる時など常に園児が安全に楽しく過ごしているかを見守っていました。

た。職場に来たらもう休みはないんだ、という気持ちで取り組みました。すると、今までは気がつかなかった園児の意外な一面を見ることができたり、ケガをしている園児にいち早く気がつくことができて、園児と関わるが増えました。園児の笑顔も今までの何倍もみることができました。そして、私は初めて「仕事のやりがい」を感じることができました。本当に嬉しかったです。仕事がものすごく楽しく思えました。

3日間の職場体験で私はたくさんのことを学びました。仕事の苦勞や大変さ、責任、仕事のやりがい、これらはすべてとても大切なものだと思います。3日間、すぐ疲れたけれど、それ以上に楽しさがありました。私には将来の夢があります。私は職場体験で感じた「仕事のやりがい」を自分の好きな仕事で感じることができるよう努力していこうと思いました。「任された仕事は責任をもって最後までやりとげる」これはとても難しいことです。しかし、その仕事の大変なこと、苦勞することを理解し、それを乗り越えることで必ず「やりがい」を感じることができます。誰かの笑顔や言葉などから必ず、感じるができます。私はこのことを忘れず、自分を必要としてくれる人がいるということを念頭に置いて、



自分の仕事に責任をもって最後までやりとげられるような人になりたいです。そして、たくさんの「やりがい」を感じることのできるような人生を歩みたいです。

生活を色どり豊かに

北区立稲付中学校 一年

青 木 徳 子

私達の暮らす街は、モノであふれかえっています。これらは、私達が自分達の街をもっと便利にしたいという思いや、もっと生活を豊かにしたいという願望から、私達の手で作ってきたモノです。

モノを作るのに必要なことの一つは、技術だと思います。私達は、今、その技術を学んでいるところです。始まったばかりなので、まだモノを作るところまではやっていません。しかし、キャビネット図や等角図、木材の特徴、寸法補助記号などは学習しました。正直に言うと、習ったばかりの頃はどこでこの学習したことが役に立つのだろうと思っていました。しかし、夏休みの宿題で役に立ちました。それは、アイディア工夫展展作品を作った時です。私は、木で箸立てを作りました。その時は、最初に材料を決めました。その次に、大きい部材から大きさを決め、細部になるほど微調整を加えながら、キャビネット図をかきました。どの材料をどの

くらい買うと良いのかも考えました。そして、木に、必要な線や印をけがいていきました。本来であれば、切りしろを考えて、材料取り寸法線と仕上がり寸法線を書かなくてはいいけません。しかし、私は、その時、そのことを忘れていて、仕上がり寸法線しか書いていなかったもので、大きさがバラバラになってしまいました。しかし、それを途中で気付けたので、残りの部材にあわてて付け足しました。また、糸のこの使い方にも苦戦しました。小学校の時は、電動のこぎりしか使わなかったのですが、手で切るのは初めてでした。最初は、切断線の位置で糸のこを動かしても、全く切れませんでした。私が困っていると、父がやり方を教えてくれました。そして、父が言ったように、切り始めは、刃と木がなるべく平行になるようにして動かすと、比較的スムーズに刃が入っていききました。二センチ程度切れたら、今度は逆に刃を木に対してなるべく垂直にして動かすと、速く切れました。ただし、残り二センチ程度になったら、最初のように刃と木を平行にしてゆっくりと動かします。そうすると、切断面がきれいになりました。切り終わったら、私は、胸がスカッとしました。また、相当な力が必要だったので、手が疲れました。しかし、のこぎりを上手に使えるようになると、楽しかったです。切り終わった後は、部材を組み立てていきました。ここでは、どの長さの釘を使うと、ちょうど良いのかということを考えました。釘打ちにも苦戦しました。なかなか釘がまっすぐ入りませんでした。それは、きつと垂直に打てていなかったからだと思います。私は、今回、モノづくりをしてみて、自分自分のモノを作るとするのは、良いことだなと思いました。な

ぜなら、人は自分で作ったモノは大切に使うからです。また、設計図を書くことや寸法通りに切断することは難かしかったですが、自分で工夫をしたり、自分のアイデアが形になったということが嬉しかったです。自分で作り、自分で使うと思うと、なんだか誇らしくなります。

また、家庭科の授業もモノづくりに役に立つと思います。今までに、様々なぬい方を学習しました。並ぬいや半返しぬい、本返しぬいなどでは、大きいモノを作ることはできませんが、服のほころびを直したり、ボタンを付けたりすることはできると思います。小学校の時に、ミシンで、エプロンを作ったことがあります。中学校では、まだミシンを使う所まではいっていませんが、ミシンを使う授業をやって、正しく使えるようになったら、洋服やバックなどを作ってみたいです。そして、相手に贈りモノをする時は、その人の好みに合った色や柄を選び、作りたいです。そうすれば、贈った相手の笑顔が見られて、私も嬉しくなると思います。また、自分で自分のモノを作る時は、世界で一つだけのモノを作ることになるので、長く大切に使えると思います。

このように、技術や家庭科を学ぶことは、モノづくりをする上で、欠かせない教科と言えるのではないのでしょうか？今まで学んできたことを生かし、今後、学ぶこともしっかりと身に付けていきたいです。そして、自分の生活を色どり豊かにするために、楽しみながらモノづくりをしていきたいです。

作ることの喜び

北区立稲付中学校 二年

小平 蒼

僕は、小さいころからものを想像して作ることが大好きです。小さいころからいろいろなものを作成してきました。

例えば、木で出来たゴムを飛ばす銃のような簡単なものや、ダンボールを使用しての秘密基地やダンボールロボットのようないろんなものだったり、紙で出来た携帯電話などだったり、数え切れないほど祖母や両親と一緒に作成してきました。ものを作ることを僕が好きなことは、両親も分かっています。よく地域で開催されているもの作りの教室などがあれば行ってみようかと誘ってくれました。そこでは、電池を使ったラジコンカーやロボット、LEDライトを使った花火の壁掛けのオブジェなど色々と作りました。初めてのことも沢山あり難しかった反面とても新鮮で夢中で作成しました。とても楽しい思い出です。今でもそれらの製作物は僕の宝物になっています。作った後に凄いなとか、上手に出来たねとほめられるのがまたうれしくて、さらに凄いものを作っておどろかせてやりたいと色々考えたりの繰り返しでした。

ものを想像して作成する工程もワクワクして、出来上がりを見ることがドキドキして楽しいのですが、形になった時の満足感は格別なものです。そして誰かにほめてもらったり、



使ってもらったりしたときは、また作りたいという気持ちも大きくなります。

ただ、いつもうまく行く訳ではありません。想像と違っていたり、失敗することもあります。中学一年生のときの技術の授業で作成した道具箱は、ふたに鍵が無くてロックできるような工夫を凝らしました。しかし、ニスの塗りすぎで肝心のふたが固まってしまい、開かなくなってしまったというハプニングが起こりました。そのまま区の展示会に出品してしまったのですが、両親に「あれはどうやって開けるの」と聞かれてとても恥ずかしい思いをしました。最初の発想と、アイデアはいいのですが、つめがいつも甘いので、最後が難になったりして、そこが僕の欠点です。

そんな僕ですが、将来は建築関係の設計に携わる仕事につけたらなと考えています。小学生の時に将来の夢は土台を作る人と言って両親に笑われたりしたことを良く思い出します。まだ、はっきりと決めている訳ではありませんが、これは小学生の頃からなんとなく思っている事で、「つくる」を仕事にできたら楽しいんだろうなと思います。自分の想像した建物が建ち、その建物をいいと思うってくれる人が居て、その建物に住んでくれる人たちが居て、ここに住んで

良かったと感じてもらえるということを想像するだけでワクワクします。しかしワクワクの反面、これを職業にして、お金をもらってやるからには失敗は許されなと思うので、その責任感に対する重圧で息苦しくなるかもしれないという不安もあります。

好きなことを仕事にすると楽しめなくなるという人もいますが、その重圧から楽しめなくなるのかなと少し感じて、分かるような気がしました。ただ、どんな仕事でも責任がついてくるのはもちろんのことだと思います。そして、実際に好きなことを本当に仕事に出来る人はほんの一部しかないと思うし、毎日好きなことと向き合えることは大変なことを差し引いても素晴らしいことだと思います。うちの両親も実際のやりたいこととはかけ離れた仕事をしています。楽しめなくなるなんて贅沢すぎる悩みだと思います。

大人になって仕事と向き合った時に、自分が子どもの頃に感じたワクワクした楽しい気持ちを思い出しながら日々取り組めたらいいと思います。その思いがきつと素敵な作品に結びつく気がするからです。これからも色々作成し、挫折したり、失敗したりを繰り返し、つくることの喜びや楽しさをもっともっと味わいたいと思います。そして僕がもし、夢がかなって設計の仕事につけて、世界の人たちに僕の作品が届く日が来たら素敵だと思います。その時には、みんなにものをつくる事は楽しいことなんだと教えてあげたいと思います。そんな日がくることを願いながら、ものづくりをこれからもいっぱい楽しみたいと思っています。

「自分の職業」に対する考え方

北区立稲付中学校 一年

福島 有紀

この先私たちがどんな職業についても、楽な仕事など一つもありません。どの仕事にも、それぞれがう大変さがあり、またそれぞれがやりがいも、あるのだと思います。

これまでの技術の授業で、「木材」のことについて学びました。私は、「木材」といっても様々な種類があることや、木材を使って何かをつくるときには気をつけなければならぬことがたくさんあることを知り、びっくりしました。また木材は、湿度によって収縮したり膨張したりするというのも、このとき初めて知りました。日本の昔ながらの家、ときいて思い浮かぶのは木造の家だと、私は思います。今は減っているかもしれないけれど、木材を使って家を建てる建築士、大工さんはすごいな、とそのとき改めて感じました。また建築の技術や法律は、今も変わり続けているため、日々勉強をしなくてはならないそうです。すごく大変な仕事なのだなあと思いました、そのおかげでより安全で快適な家に私たちが住めるということなので、感謝の気持ちでいっぱいです。

そして最近、農業などの話題も耳にします。「食」というのは人が「生きていく」ために重要なものです。私たちの生活には欠かせず、健康を保つのに大切な役割を果たしま

す。最近は何の食材に限らず、様々な食材をどんな季節でも食べられるようになってきました。売り場に行くと、「外国産」の物が売られているのを、よく目にします。魚でも肉でもそうだけれど、外国産の物は国産の物に比べて価格が安いことがほとんどです。そのこと自体は悪いこととは思わなけれど、そのせいで国内産の物が売られなくなり、作る人が少なくなってしまうときに、輸入させてもらっていた相手の国が日本に輸出できなくなってしまったということがあれば、日本も影響を受けてしまうのではないかと思います。十分に考えられます。さらに、その食材自体が日本人にあまり食べられなくなってしまいうこともあり。例えばお米です。昔は米がお金のようにあつかわれるようなこともあり、日本の主食として大切にされてきたのですが、最近は米の消費量が減り、米農家の人たちも米づくりだけではやっていくことがむずかしくなってきたようです。そんな中、農家の人たちは暑い日も、寒い日も頑張って農作業をしています。様々な困難がある中で、日本が困る日がこないようにと食材を作っている人がいるからこそ、私たちが食材を買うときに「日本産」という選択ができるのだと思いました。とてもありがたいことだと思います。

そして、その職業に対して情熱や誇りをもっているからこそ、その職業の大変なところがあってもそれを乗りこえてやりがいを見つけることができるのだと、この二つの出来事を通じて感じました。私はこのことは、とてもすごいことだと思えました。そして私は、人のため、世の中のためにこうして一生けん命私たちの知らないところで働いている人たちに

対して、しっかり感謝の気持ちを持ち、それを常に忘れないようにしていきたいと思います。そして将来も自分は、そんな人になっていきたいです。人のため、世の中のために頑張る、自分の仕事に対しての情熱や誇りを胸に、大変なときでもそれを乗りこえてやりがいを見つけることができる人になりたいです。自分の職業にただ単に「お金をもらうため」だけにやるのではなく、そういった心を常にもっておくことは、とても大切なことだと思います。

「人の幸せが自分の幸せ」と、強く感じ、立派になるために必要なものの一つが、この「自分の職業」に対する考えだと、私は思います。どんな職業についても、楽な仕事など一つありません。私はこのことについてしっかり受けとめ、自分の将来のことについてや人生のことについて、もう少し深く、改めて考えてみたいと思います。

五日間の勤労留学を終えて

荒川区立第七中学校 二年

宮坂 羽衣

私は、五日間、美容室での仕事を体験させて頂きました。人を綺麗にする、笑顔にする仕事に就くことは、私の夢であったため、決まった時はとても嬉しかったです。美容室の仕事

は、沢山ありましたが、主にさせて頂いたことは、タオルをたたんだりカラーリング剤を準備したり、床のはき掃除をするなどでした。また、一日中立ち仕事のため、私は思っていたより辛い仕事だなという印象を持ちました。

中でも一番印象に残っている仕事がありました。それは、床のはき掃除です。これは、私が初めて教えて頂いた仕事でした。この仕事は、タイミングがとても大切で、お店の方がお客さんの髪の毛を切り、持ち場を離れた所ですばやく、ていねいに床におちている髪の毛をほうきではなくという仕事です。慣れるまでが難しく、苦戦しましたが、日に日に慣れていき、上手にタイミングをつかめた時、お店の方が褒めて下さいました。この時私は初めて仕事のやりがいを感じました。時には、タイミングを間違えてしまい、お店の方がタイミングのとり方を教えて下さったり、アドバイスに気を付けながらお仕事をしたり、タイミングを徐々につかむことができたので嬉しかったです。

他にも、お客さんに合った雑誌を選ぶことも大変でした。お客さんの年齢層に合わせて雑誌を選ぶため、間違えてしまうこともありました。お客様を見てどのようにすればいいのか瞬時に判断するのですが、お店の人に聞くことで、解決策が見つかりました。お客様の、服装の雰囲気、私の身近な人の年齢に近いと感じた雑誌を選ぶ等、どの雑誌がどの年齢層なのかを覚えることも難しかったです。

このようなことから、分からないことがあったらすぐに聞くことや自分の判断力が大切なことが分かりました。最終日にはパーマの勉強会の体験をさせて頂きました。水、

くし、専用の紙、ロッドという棒状のもの、ゴムを使ってパーマをかける練習をしました。始めに、マネキンの髪の毛に水をかけ、くしを使ってロッドに巻く髪の毛をとります。次に、専用の紙とロッドを使って髪の毛を巻き、最後にゴムをつけて固定します。これを何度もうり返し、髪の毛全体にパーマをかけたり、部分的にパーマをかけたりするのですが、なかなか上手に出来ずとても時間がかかりました。毎日早く正確にパーマをかけているお店の人は、本当にすごいなと思いました。とても難しい練習でしたが、やりがいがあり楽しかったです。

他に印象に残っているのは、美容室の中では、番号を使って会話をしている所でした。それぞれの仕事に番号をつけていて、「○○お願いします。」などお願いする時などに多く使われていました。私が教えて頂いた中では、七番は片付け、九番は休憩、八十九番は床のはき掃除、九十番は大きな声で、という意味で使われていました。お客さんに言葉の意味が分からないように番号を使って会話する工夫はすごいと思いました。また、五日間を通して、使うことができる言葉が増えていったことがとても嬉しかったです。番号を使うということは、事前学習の時に先輩に教えて頂いていたので、知っている番号もあり、とても役立ちました。

私は、今回の五日間の勤労留学で接客の仕方や美容室の仕事を学びました。五日間という貴重な時間の中で教えて頂いたことは、仕事をするという事の楽しさや、大変さを感じました。また、職種が異なっているのですが、毎日働き、家に帰って来ても家事をしている父と母は本当にすごいなと改めて思

いました。少しでも、父と母が休めるようにお手伝いをしていきたいと思いました。

昨年、父に仕事について聞いたことがあるのですが、仕事というものがなければ、私達は生活することが出来なくなり、また、仕事をする事の喜びがあるから働き続けられるといった話を思い出し、現在私が便利に生活ができるのは、父が働き生活を支えてくれているからだと改めて感じました。今回体験したことを、これからの学校生活に生かし、将来、就職した時に生かしていけるようにしたいと思います。そして、自分の目指している職業に向けて、生活の中で努力していきたいと思います。

人を笑顔にすることが出来る人になれるよう頑張ります。



ボランティア活動で得たもの

荒川区立第三中学校 三年

永 山 琴

私は二年生のときに、近くの公園のお祭りにボランティア活動として参加した。私はよくボランティアをするほうで、お祭りに参加する場合はたいていゴミ拾いを担当することが多い。そのボランティアのときも多分ゴミ拾いをするだろうなと思っていた。ところが、町内会の方に、

「人手が足りないからこっちを手伝って！」

と言われ、予想外なことにお祭りに出店していた福島農家のお店の手伝いをするようになった。その仕事はまるで職業体験をしているかのようなものだった。

このボランティアで学んだことは三つある。一つめは働くことの楽しさ、二つめは働くことの難しさ、三つめは人の温かさだ。

まず一つめの働くことの楽しさは、まさかボランティアで感じるようになるとは思ってもいなかった。その出店で私は会計を担当した。会計とはいっても、する作業は値段の計算だけではなくて会計をするのと同時に商品の袋づめや袋の補充なども行った。この日の午前中はのんびりとした雰囲気でお店の方と楽しく話しながら接客をしていた。お昼ごろになるとだんだんお客さんも増え始め、長い列が出来るほどにな

った。そうすると午前のようなのにのんびりもしていられなくて、フル回転で手を動かし、会計をした。最初のほうは忙しくて計算をまちがえたり、大変だったが、手を休ませずに次々と接客することに大きな充実感を感じた。そして商品をお客さんに渡したときに「ありがとう」と笑顔で言われて、とてもうれしい気持ちになった。夕方になってお祭りが終わると、何時間も働いたことに達成感も感じることができた。その時に私は「働くって楽しいな」としみじみ感じた。

次に二つめの働くことの難しさについて述べる。午後は忙しかったのでお会計の誤算をしてしまうことがたびたびあった。幸運なことに、隣にいた友達が間違いに気づいてくれたので、お客さんに迷惑をかけることなく済んだ。会計には電卓が使えなかったので素早く正しく暗算するのは難しかった。それに加えて出店の中はせまかった。袋が足りなくなったときや商品を補充をしなければいけないとき、接客をしながら行わなければいけなかったため、効率良く動くのも難しかった。

お客さんが増えるのに伴い、クレームもときどき耳に入ってきた。きゅうりが小さいとか、値段が高いなど様々なものだ。その中でも一番心に残っているのは福島県産の桃についてのクレームである。その内容は、福島県の桃は放射能の影響があるから食べたくないというものだ。私はそれを聞いて胸が痛くなった。私は仙台市出身で東日本大震災があったときも被災地の復興を何よりも強く願っていた。お店の人も復興の力になればという思いで今回出店したと言っていた。そ

れなのにあの一言を聞いて、まだそう思っている人もいるのだなとがっかりしてしまった。

「働く」となると、そういったお客さんの真の声も聞こえてきてしまうので複雑である。

三つめの人の温かさは、今回のボランティア活動で最も強く感じる事ができた。

お店の方々はみんな優しく話しやすい人達だった。お客さんの中にはお年寄りも多くて耳が遠い人もいたが、お店の人は優しい口調で笑顔で話しかけていて自然とお客さんも笑顔になってるのが見ていてよく分かった。お会計をするだけでせいっぱいだった私はその様子を見てとても感動した。

全ての仕事が終わった後、お店の方は私たちに、

「手伝ってくれてありがとう。」

と言い、桃が二、三十個入ったダンボールと缶の桃ジュース数本をくれた。私はこれにとっても驚いた。会計の誤算はするし、接客は下手だし、迷惑ばかりかけたと思っていたが、「ありがとう」と言葉で直接言われて心がとても温かくなった。そして今まで食べたことのない大量の桃に驚きとともに、とてもないうれしさを感じた。私は数えきれないほどお礼を言ったが、言葉だけでは言い表せないほどの感謝の気持ちでいっぱいになった。

家に帰って私はさっそく母に桃をむいてもらい、わくわくして食べた。とても甘くて、少し酸味もあり、いつも食べてる桃より何倍も何十倍も美味しかった。

一年前のこの出来事を、桃を食べるたびに思い出している。

この経験で私は、働くことについて色々と学ぶことができたし、私のこれからの人生に役立っただろう。

職場体験から見る社会

東村山市立東村山第四中学校 三年

神 澤 由 己

ものや事柄について深く知る上で、「体験すること」は非常に効果的だろう。自ら体験することによって、実際にやってみないと分からないことや感じることでできない感情、思いを知ることができる。いくら話で聞いたり、文章で読んだりしても実際に体験すると新たな発見があったりもする。

現代の中学生が知り得ぬ重要なことといえば「社会での労働」であろう。中学校を卒業した後は、就職する人もいるだろうし、進学する高校によってはアルバイトをする人もいるはずだ。しかし、中学生であるうちは、会社や施設で働いて、お金を稼ぐことはまずないことだ。将来的には、ほとんどの人が就職する。それならば、なるべく若いうちに体験したほうがいい。そして、この世界での労働の重要性や役割を知ってほしい。こういう目的で中学校は職場体験をさせるのだと思う。

僕は、二年生のときに図書館での職場体験をした。その職場体験は大変ではあったが、新しい発見や意外な仕事など、



多くのことを知ることができた。そして、その中でも重要なことを知ったと思っている。

それは、「仕事の重要性」だ。図書館は、就職すると思うと少し地味なような気もするが、役割は重要だ。人々、特に学生にとっては、何かを調べるときに役に立つ。書籍は、インターネット上の情報と比べ、信憑性が高い。そういった本を無料で読めるのだから、学生にとっても、大人にとっても重要でうれしい施設だ。

地味だが、重要。こういった仕事は多いと思う。例えば、何かのねじをつくる工場があるとすると、ねじは、ものをつくったり、設置したりする上で必要だ。もし、こういった工場が突如世界からなくなったら、そのねじを使った製品もつくれなくなる。そのねじを使った製品がなくなると、その製品を使って行う仕事ができなくなる。こういった連鎖が起

こると、社会全体の崩壊につながる恐れすらある。つまり、そういった目立たない仕事は、社会の基盤になっているといえる。どんな小さい仕事も、社会全体の重要な一部となっている。

そして、目立たない仕事というのは、人の目につき仕事より随分と多い。これも、職場体験で分かったこ

とのひとつだ。裏方での仕事、開館前の仕事など、人目につかない仕事は、体験しないと分からないことだと思う。人は目につく仕事しか見えないため、それだけでその仕事を判断しがちだが、実際には知られていない仕事も多い、ともいえる。そういった、人がまず知らない仕事がたくさんあり、それらのそれぞれが社会における重要な役割をもっていることは、もっと認知されるべきである。

人は、協力し合って生きている。自分の得意なことを活かして、自分の力でできないことはそれができる人に手伝ってもらう。自分の力で何でもできる人などいないのだから、その分、自分ができることを人のためにやる。社会において、仕事、あるいは自分自身が重要なのは、「自分の能力を活かし、何かを手伝ってあげることができる」からだ。何かがないと、困る人がいる。保護しないと、絶滅する生き物がいる。対策しないと、壊れるものがある。そういう人やものを直接的ではなくても助けられる。被災地などに募金をしたり、世界の現状を言論や文章で伝えたり、誰にでもできるようなことを行うことで変わることもある。それを実際に変えるためには、行動、つまり仕事が必要だ。

災害時には、新聞やニュースで状況を伝えなければならなし、人が助けを求めるようなときには救助隊などが救助し、病院などで治療する場合もある。家が壊れてしまった場合には、住む場所や食料を提供する必要がある。このように実に様々な仕事が必要だということが分かる。募金が集まっただけで誰も仕事をしなかったら何もできない。状況を伝えただけで、実際に行動を起こさなければ何も変わらない。一人一

人の行動と社会が行う仕事の両方がなければならないのだ。小さく目立たない仕事も、社会全体に認知される有名な仕事も、「何かの役に立っている」という点では同じだ。だから、どんな仕事も必要不可欠なのである。職場体験を通して、この社会と仕事の意義を知ることができた。将来、自分が就職したときも、どこかで何かの役に立っていることを忘れず、胸を張って働きたい。

私らしいものづくり

町田市立真光寺中学校 一年

近 澤 爽 風

ものをつくること、それは私にとってとても楽しいことである。人によっては面倒だったりするかもしれないけど、私の場合は納得いく作品となるまで無我夢中で取り組むことが出来る。今まで十三年間生きてきた中で、折り紙から始まり幼稚園での工作、小学校での図工や家庭科での製作、自由研究での作品づくりなど、たくさんものをこしらえてきた。中には上手くつくることが出来ず、思い出したいくない作品もあるけれど、どれもいろいろな思い出がたくさん詰まっている。

小さい頃、特に幼稚園の頃は、季節感があるものをよく作ったものだ。こいのぼり、母の日・父の日のためのプレゼント、

クリスマスに飾るものなど、あげればきりが無い。小学校になると実用性のあるものが多くなった気がした。小学校で作った中で一番思い入れのある作品はホワイトボードだ。板を大好きなネコの形に切り、お腹の部分をホワイトボードにしたものだが、自分の部屋に飾ることを想定して、色使い、形など考えつくったものだから、とても満足いく作品となった。もちろん今現在も愛用しており、お気に入りの写真を貼ったりしている。また、我が家にある木製の脚立は、母が中学校の技術の授業で作ったものであった。今から何十年も前につくったのに、今でも高いところの作業にはかかせないものとなっている。丈夫に作られていたからか、壊れることもなく、ここまで使われ続けている。中学校に入ってからまだ間もないため、まだ作品をつくることはしていないけれど、この先どんなものを製作するのか心待ちにしている。

こうした経験から、ものをただ単につくればいいのではなく、使い手のことをよく考え、役立つものにしなければならぬと感じた。ものは使われなくては意味がなく、使われなものは置き物になってしまう。生活や暮らしに役立つことで、私たちの生活に豊かさをもたらしてくれるものであるべきだと感じた。

しかし、たくさんつくってばかりではものがあふれてしまう。ものをつくることができるなら、ものが壊れた時に直す技術も必要だ。自分がつくったものであれば直しやすいかもしれないが、人がつくったものを直すのは難しいことである。

私は小学六年生のとき、年に一度の学校のお祭りでお化け

屋敷の係りになった。教室を真っ暗にして驚かすのだが、気分を出すために友達がランタンを用意してくれていた。しかしランタンは使っているうちに光がつかなくなってしまった。みんな慌てていたが、私は直せるのでは？と思い、少しずつ分解しながら原因を探った。いろいろなじっているうちにランタンはまた明かりを照らすようになった。正しいやり方であったかはわからないけど、その時の嬉しさは今でも記憶に残っている。直すことができて嬉しいのと、そのランタンを無駄にしなくて済んだという二つの喜びがあった。それからというもの、身近なものが壊れた時、まずは直せないかと考えるようになったと思っている。

今、中学校の技術の授業では、鉄や木の性質について学んだりしている。小学校までの工作とは異なり、材料の性質を理解した上で、最適な方法を学びながらものづくりに取り組んでいく。確かにつくられたものを購入し、利用していくのはたやすいことだが、今の世の中はホームセンターなどで、自分の思い通りに家具を製作することが出来る時代となった。これからは技術・家庭の授業で得た知識を役立て、自分らしいものをつくっていききたいと思う。そして、長く使用することができるためにも、材料の性質をよく理解し、最適な方法でつくっていききたい。それと同時に、ものを修理する力も身につけ、ものが使えなくなったとき、すぐ捨てるという手段をとらずにすむようにしていきたい。ものがありふれた世の中だからこそ、ものづくりについてきちんと向き合うことが大切である。今回このような機会を得て、ものづくりについて考えることができ、大変貴重な経験となった。

相手の気持ちになる

町田市立真光寺中学校 三年

武田 千陽

仕事というものを私は職場体験をするまでめんどくさいこと、やりたくなくてもやらなければならぬことだと思っていました。できるなら働きたくないというふうにはかかっていませんでした。でも体験を通して、仕事に対する意識が変わりました。

僕は保育士という仕事を体験しました。初日は園児をどのように接すればいいか困りました。園児に対しては同じ年齢の人との会話のような言い方では伝わりません。一つ一つ丁寧にいわなければいけないのです。簡単な仕事はないと一日体験しただけでも痛感しました。家に帰るとすごい疲れを感じて大変だと更に感じました。それでもうれしいことがありました。「ありがとう」という言葉です。僕はこの言葉を園児に言われてとてもうれしかったです。それは手を抜かず一生懸命やったからだといふのは僕に思っています。二日目からは運動会の練習などが始まって、音に合わせて園児と一緒に踊ったり、飲み物を配布したりと、はずかしいことや一つ一つ地道にやるような仕事をたくさんやりました。でも、最初とは違ってめんどくさいという気持ちより楽しいという気持ちがめばえてきました。三日目・四日目と同じような毎日が過ぎ、最

終日になりました。園児達からは先生と呼ばれるようになったり、子供達と遊ぶことも慣れて初めての時とは別人のように体験が終わるのは嫌だなと思いました。体験が終わってからはとても楽しかった思い出の一つとなりました。

僕はこのとき仕事の大事なことが少し分かった気がしました。自分が楽しいことがいいと自分を優先する考えではなく自分がサービスを提供する側を楽しく充実するようにする。それが仕事なのかと少し思いました。

しかし、仕事はお金をもらっているので、生きていくためにはやはり少しぐらい嫌でもやらなければならないことです。ボランティアはお金をもらえないのにどうしてやる気になれるのかと疑問に思いました。僕はボランティアを体験したことはありますが、ニュースの特集などでボランティアをやっている人を見たことがあります。たとえば、英語が好きで得意になった少年が外国人観光客のガイドをやっていたり、川辺が汚いことから川辺を掃除する人がいたり、自分の好きな車で誰かに貢献をしたり、自分に利益がなくても働くという人がいるそうです。これも結局は誰かのためになるようにという気持ちがあるから一歩踏み出して誰かのためになるうとしていると思います。

仕事は必ずしも自分の好きなこと、やりたいことでなくてもいいのかなと少し思います。体験学習で行った仕事場所が僕は第一の希望ではありませんでした。それでも楽しく五日間過ごせたのは自分が誰かのために働いたことで「ありがとう」と感謝されたからだだと思います。どんな人でも感謝されたら働いてよかったなとか、もっといい仕事をしたいなど次

へつなげたいという意欲が湧きこの世の中がどんどん良くなっていくと思います。

その中で少しつらいな、嫌だなと思うときがあると思います。そういうときには自分の好きなことをやったりするといいのではないかと思えます。自分が仕事をしっかりすることによってゴミ問題だったりがよくなるかもしれませんし、仕事をすることで自分も他人も幸せになることができます。それはとてもいいことだと思います。体験をしたことで仕事に本気を出して取り組むことがいかにすばらしいことかを理解できました。

働くということは誰かのためになるということになり国のためになるということであり世界のためになるということになると思います。誰かが喜んでくれる仕事をするることによって自分以外の人も自分も楽しくなれる、それが仕事の大切さだと僕は思いました。



職場体験で学んだこと

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

大 嶋 育 実

私は、職業体験で、大きな駅の中にある鉄道会社の事務所に行きました。その中で私はいくつかのことを学びました。

一つめは、マナーの大切さです。今回の職場体験の中で私は、駅の中を巡回して困っている人の手伝いをしたりポストターの補充をしたりする仕事の体験をしました。その中で、「駅のゴミを拾う」というものがありました。駅をまわっていると、パンフレットのところに雑誌があったり、缶やペットボトルがあったりと、思ったよりも多くのゴミがありました。駅の中には、テロ防止のためにゴミ箱がありませんが、裏で頑張っている人たちが、社会常識を考えると駅にポイ捨てするのはおかしいと思いました。駅だけでなく、街もきれいにすることが大切だと気付く良い機会になりました。

二つめは、時間を守ることの大切さです。今回行った会社には、電車の運転手や車掌などが仮眠をする施設がありました。そのベッドは、時間になると絶対起こされるような仕組みになっていました。運転手などは、時間通りに動かないと、運行に影響し、多くの人に迷惑がかかります。このような時間管理が徹底していて、時間の大切さを感じることがで

きました。

三つめは、「表だけではない」ということです。駅で働く人というと、真っ先に駅員や運転手を想像すると思います。しかし、今回の体験を通して、それは駅で働く人の一部にすぎないことが分かりました。私が見学した仕事は、改札の駅員など、表から見える部分だけではなく、信号の管理の仕事や駅の司令塔のような役割を果たす仕事もありました。信号を管理する人がいないと、電車が事故になる、駅に指示を出す人がいないと、トラブルなどが起こったとき、どうすればいいか分からない、というふうに、それぞれの仕事が大事な役割があるのだと分かります。普段目にしなくても、裏で活躍している人がいる、ということのを常に頭の中に入れておきたいと思います。

四つめは、あいさつや身だしなみの大切さです。職場体験のとき、担当の方から人の印象の受け方について教えていただきました。人の印象というのは、目から入る印象（表情や姿勢など）が五十五パーセントと、半分以上をしめているそうです。だから、誰かに話しかけるときは、元気にあいさつをし、暗い印象を与えないようにしたいと思いました。

五つめは、「連携」についてです。今回、職場の見学中、駅の中で迷子になってしまった子の情報が入り、放送している場面を見ました。しかし、なかなか保護者が見つからず、駅の方は、管轄外にいるかもしれない、と、他の鉄道会社と連絡をしました。私は、駅は一緒に他の会社同士はあまり関係がないと思っていたので、この行動は意外だと感じまし

た。会社同士の連携はこれだけではありませんでした。もう一つは、「終電の時刻」です。今回私が行った駅は、ターミナル駅で、乗り換えに使う人も多くいます。そのため、終電の時刻をかぶらないようにして、乗り換えできるよう、会社同士で工夫しているそうです。また、どこかの電車が遅れたときは、他の電車も遅らせて、帰れない人がいないようにしているそうです。私は、お客さんのために色々な工夫がされていることを知ることができました。

このように、職場体験を通して、普段駅を利用するときには気付かないようなことをたくさん学ぶことができました。私が特に印象深かったのは、会社同士のつながりです。世の中には、このようなことが色々あると思うので、もっと知りたいと思いました。今回の職場体験で見たこと、聞いたこと、学んだことを忘れず、また、学んだことをこれからの生活で活かしていきたいです。

働ける理由

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

小 野 満里奈

私は、お父さんやお母さんはお仕事が大変そうなのに働こうと思える理由は、お金をかせがなくてはいけなからだけだと思っていた。しかし、職場体験を通して、もう一つ理由

があるのだと気がついた。

職場体験では、保育園で働いた。私には保育園に通っていないところがある。その子と遊ぶのはとても楽しいので、体験場所が保育園に決まった時は嬉しかった。また、事前訪問ではお昼寝の時間だったが、子供たちが寝ている姿はともかわいく、手を振ってくれる子もいて、職場体験が楽しみなった。

そして、私は二歳児クラスを担当することになった。二歳の子供は、まだきちんとコミュニケーションがとれないので、積み木や水遊びのじょうろ一つでけんかをしてしまう。しかも、話し合いで解決せずに、たたいたりつねったりして手を出してしまうことにとっても困った。また、一日目は質問攻めでわかりやすいように答えてあげるのは難しかった。しかし、子供たちと一緒に過ごすごとに、話しかけに来てくれたり遊びにさそってくれたりする子供が増えてとても嬉しかった。このように、仲良くなっていくと同時に、一人一人の性格もわかるようになっておもしろかった。おとなしい子、水が嫌いな子、寝起きが悪い子など小さいながらも個性があることを実感した。

保育園では、保育士さんが子供たちと関わる上での約束があり、それを教えていただいた。その中で私が一番印象に残ったのは、クラスの中に入ったら原則正座でいることだ。これは、一緒に遊ぶときでも話すときでも目線を合わせるためである。私たちや大人が立ったまま子供たちに話しかけてしまうと威圧してしまう。実際、正座でいるのは大変だったが立っているときよりも子供たちとの距離は近づいた気がした。私

はこの約束を聞き、子供たちの立場に立って考えている保育士さんの優しさを知れた。

職場体験をしてみなければわからなかったお仕事をしたり体験することができた。それはお昼寝の時間だ。子供たちは寝てしまうので、お仕事は少ないと思っていたがそうではなかった。お昼寝中は、百個以上あるつみ木を一つずつふく、トイレトペーパーを三つ折りにする作業をくり返すなど地道で本当に大変だった。子供たちが寝ていて静かな部屋の中で保育士さんたちは見えない場所で大変なお仕事をしていたのだとわかった。

保育園で三日間働くだけでも本当に大変だった。二歳の子供とのコミュニケーションのとり方、周りに気を配って仕事を探す、環境整備の地道なお仕事など実際に体験してみても「仕事」の大変さを少しだけでも知れたと思う。また、職場体験のお昼休みのお弁当はとてもおいしくて、同級生との会話もとても楽しかった。こんなにお弁当がおいしくて、お昼休みが楽しいのは、働いていたからではないかと私は考える。働いた後の達成感などもこの職場体験で感じることにできた。

私は、この職場体験で働くことの大変さを思い知った。しかし、一度もこの仕事は嫌だという気持ちややめてしまいたいと思うことはなかった。その理由が、お父さんやお母さんなどの大人が働こうと思えるもう一つの理由であると考ええる。二歳の子供たちと接するのは難しくて苦労したが、仲良くなれていることを感じたり私の名前を読んでもくれたりしたときはとても嬉しかった。お昼寝の時間の地道なお仕事はつ

らかったが、私がふいた積み木で楽しそうに遊んでくれるところを見て、やってよかったと思えた。そして、最後日のお別れするとき、みんなが「ありがとう」と言ってタッチしてくれたとき、三日間の疲れが吹き飛ぶくらいに嬉しかった。このように、自分が精一杯やったことに対して、誰かが笑顔になる姿を見たり、「ありがとう」と言ってもらえると、やって良かったと思え、とても嬉しくなる。そうすると、今まで大変だったことも苦労も疲れも、嫌ではなくなると思う。だから、私はつらくても大変でも人が働くことができる理由は、「お金をかせぐため」だけではなく、「誰かに喜んでもらうため」でもあると考える。私は今回の職場体験で、働くことの大変さを知ると共に、働くことの喜びや楽しさも知れた。将来、私は誰かの役に立てる職に就き、誰かのために働ける人になりたい。



気づかれるためではなく、誰かのために

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

齋 藤 小 桃

「どんな仕事でも誰かの役に立っている」これが今回の職場体験を通して私が学び得たことです。

今回の職場体験をさせていただくまで、世の中には誰かの役に立っている仕事がある一方、実際には誰かの役に立っていない仕事もあるのではないかと私は考えていました。しかし、今回の体験で、私のその考えは、大きく覆えされたのです。私が職場体験させていただいたのは、幼稚園の職場でした。私とその職場でまず感じたのは、先生方の裏での仕事の多さです。当たり前のことかもしれませんが、子供達と関わる仕事の他にも、トイレ掃除や作品製作用の材料作りなど、朝早くや子供達が帰った後にも多くの仕事に取り組まれている、私はとても驚きました。そして、今でも私の心に強く残っているのは、トイレ掃除を手伝わせていただいたときの体験です。先生方にトイレ掃除の仕方を教えていただいたとき、床のすみずみまで、全てをきれいにすることにも驚きました。が、私は先生がおっしゃった言葉に強く心を打たれました。「こうやってすみずみまできれいにするのは全部このトイレを使う子供達のためなんだよ。子供達は僕達がこままできれいにしていることに気づかないかもしれないけど、掃除をす

るのは気づいてもらうためじゃなくて子供達の健康のためだから、それでいいんだよ。」私は今までの生活の中で仕事はやっていることが気づかれないうと意味がないと思ったことがないわけではなかったのだ、その言葉にはっと本当に大切なことを気づかされた気がしました。さらにそこに迫りうちをかけたのは子供達の言葉でした。私達がトイレ掃除をしていることに気がついた子供達が、「お姉ちゃん達ありがとう。」と声をかけてくれたのです。気づいてお礼を言ってくれたことがうれしかったのはもちろんですが、それよりもきちんと子供達の役に立っている、子供達のためになる仕事ができていると思えたことが、本当にうれしかったです。よりそう感じる事ができたのは、先生のあのお言葉があったからかもしれません。この体験をしたあと、私はそれまで以上に誰かのために、気づかれなくても仕事をやろうと思えるようになりました。その後も、先生方や子供達から、そしてさまざまな体験を通してとても多くのことを学ばせていただくことができました。三日間、私達の職場体験をさまざまな方面から支えてくださった方々に心からお礼を言いたいです。

今回の職場体験は私にとってとても貴重で価値ある、刺激的なものになったと思います。幼稚園での仕事は想像以上に大変な部分もありましたが、社会の一員としての大変さと同じ時に、仕事の喜びややりがいも感じる事ができ、うれしかったです。また実際に働かせていただいたことで、表だけでなく、裏方で仕事を支え、成り立たせている人がいるということも知ることができました。自分が今まで体験したことのある子供という立場からではなく、先生方の立場に立って物事

を見たときにいろいろなことが今までとは違って見え、仕事への考え方を根本から変えることができたと思います。今回私が学んだ「どんな仕事でも誰かの役に立っている」ということは、幼稚園だけのことではなく、社会全体で考えても、全ての仕事に当てはまるでしょう。世界が気がつかれないかもしれない仕事で支えられ、成り立っているとしたら、私はとても素敵だと思います。そして、実際にそうなのです。今回の職場体験で学んだこと、気がついたことを、私はこれらの自分の人生に活かしていきたいです。これから大人になって何かの職業に就くときですが、これから生活の中で取り組むどんな仕事にも「どんな仕事でも誰かの役に立っている」という考えを持って取り組み、気づかれなくても人のためになる仕事を全力でできる人になりたいです。



高等学校の部 最優秀賞

決意

愛国高等学校 三年

限 部 愛

無機質な廊下。機械音が鳴り響く部屋。ICUだった。祖父はベッドに横たわっていた。その姿は以前の元気であった祖父ではなかった。人工呼吸器をつけ点滴や心電図、血圧計、膀胱留置カテーテル、様々な管に繋がれていた。鎮静剤を使用した影響から意識が朦朧としていた。

医師から病状について説明があるとのこととで親戚全員が集まった。病名は急性呼吸不全。また、肺の機能が低下すると同時に多臓器不全を引き起こしているということだった。今後意識が戻ることはなく、「もって後二日」ということが告げられた。余命宣告を受けたのだ。

信じることが出来なかった。なぜなら祖父は、これまで大きな病気にかったことが無く、健康に関して人一倍気を使っていたからだ。朝早くからウォーキングをし、太極拳に参加する。そして午後になるとスポーツジムに行き汗を流していた。祖父自身、いつも足腰が強く健康であると自慢していたくらいだった。

だが、若い頃、喫煙をしていた影響からか、COPD（慢性閉塞性肺疾患）の傾向があり、肺が少し弱っていた。咳や

痰が出るなどの症状は出ていたが近くの総合病院で定期的に受診をし、毎年欠かさず健康診断も受けていた。そんな祖父がなぜこんなにも急激に病状が悪化したのか。この状況を受け入れることが出来なかった。

衛生看護科の三年生となっていた私は、このころ、病院で「成人実習」の実習中であつたので、祖父の家を訪れることは少なかった。しかし、一週間前に祖父の家に行った時、咳をするといつもと違う「ぜえぜえ」という呼吸苦が見られたので病院を受診するよう勧め、日にちもその時に決めた。帰宅する際、「じいちゃん、またくるからね。」と言うと、「おう」と言っただけで手を振ってくれた。その笑顔を見て安心していた。だが、このや

りとりが祖父との最後になるなど、この時は夢にも思っていなかった。しかしその受診日を待たず異変が起きてしまったのだ。たまたま両親が祖父の家を訪れると、祖父は呼吸を十分にすることが出来ず歩けないでいたのだ。すぐに入院することになった。その時は意識もはっきりし会話することもできたそう



高等学校の部 最優秀賞 限部 愛さん

だ。しかしその夜、自発呼吸をするのが困難となり人工呼吸器をつけICU（集中治療室）へ。母から聞いた話だが、祖父は最後まで「孫がいる病院にいく」「孫は看護師なんだ。」と言って聞かなかったそうだ。祖父は私が看護師になりたいという夢を誰よりも応援してくれた。まだ看護学生ではあるが、それが祖父の自慢であったらしい。

祖父が入院してから毎日、家族全員でお見舞いに行った。ICUであった為、面会時間は十分程度であった。初めは変わり果てた祖父の姿にショックを押さえきれず、声をかけてあげることもできなかった。その時、父に「まだ亡くなったわけじゃない。戦っているんだ。信じなくてどうする。」と言われ、目が覚めたような感じがした。それから、意識のない祖父の手を握りしめ、耳元で「会いに来たよ。」と声をかけた。すると祖父は微かに首を動かすなどの反応を示した。私たちの声は祖父に届いていたのだと思う。

実習中であった私は、祖父と同じように人工呼吸器を着けている方、同じ年齢の方、そのような患者様を見る度に、どうしてもその姿を祖父と重ねてしまう。それは本当に辛いことであった。祖父に何もしてあげることができないという思いから、今日の前の患者様にとって最善のケアは何か、以前より考えて実行するようになった。実習中ではあったが、祖父の病院へ行けるように、実習が終わり次第、早く帰す配慮をしていただき、色々な人に支えられているということを実感した。

ある日、自宅に帰ると電話が鳴った。病院からだった。急いで病院に行くと、危篤状態の祖父がそこにいた。手を握る

と暖かかったのだが、血圧が下がるにつれ徐々に冷たくなっていくのがわかった。「ピー…。」この音が病室に鳴り響いた。祖父は静かに息を引きとった。家族、親戚一同が集まり祖父のベッドを囲む形で最期を看取ることができた。当初医師からは、「もって二日」と言われていたが、五日後に亡くなった。あれから一ヶ月。まだ祖父の死を受け入れることは出来ていない。祖父が使っていたラジオ、補聴器、書き込んだカレンダー。生きていた証を目にする度に目頭を熱くする。目をつぶれば祖父の笑みを浮かべる顔を思い出す。もう一度。あと一度だけ話したい。

私が看護師を目指した理由。それは祖父母のことを自身が介護してあげたいという思いがあったからだ。祖父の早すぎる死。まだ看護師になった姿も見せてあげられなかった。学生である自分の不甲斐なさに押しつぶされそうになった。だが、唯一の救いは戴帽式での姿を見せてあげられたことだった。

告別式でのお別れの際、私は祖父に誓ったことがある。それは立派な看護師になるということだ。患者様にとって最善のケアを提供する。さらに言えば、患者様の心に寄り添うことは勿論のこと、そのご家族の方々のケアに努める。そんな看護師になり、祖父に胸を張って報告することを目標として、努力を続けていきたい。たとえ、辛く高い壁にぶつかり挫折することがあっても、どのような困難にも立ち上がり、夢を叶えるという強い信念をもって、今あるかけがえのない日々を大切に過ごしていきたい。祖父が見守ってくれていると信じて。

高等学校の部 優秀賞

家畜とペット

東京都立瑞穂農芸高等学校 二年

四 宮 桃

「家畜とペットは違う。間違えないように。」これは畜産科学科に入学して最初の自己紹介の時、先生から言われた言葉です。まだ畜産の授業も受けておらず、何も知らなかった私でしたがその話を聞いた時「そんなこと十分わかっている、私は大丈夫。間違えることはない」と強く思っていました。

授業が始まり、初めて学ぶ畜産は、どんなことも新鮮で早く次の内容も知りたいと、ワクワクしていました。特に印象深いのは肉用鶏の飼育です。この実習ではニワトリをヒナから約六十日間飼育し、と畜、解体までを行いました。愛情を込めて飼育した肉用鶏を自分の手だと畜した時も家畜として肉を生産するために飼っている、という気持ちで悲しみは少なく、この頂いた命を無駄にせず上手に解体したい、という気持ちの方が強くありました。

二年生になり、養豚類型の一員としてブタの種付けや分娩、出荷などに立ち会い、ケガや病気などを学ぶと同時に様々な課題を目にしました。種豚以外の雄は去勢され百八十日齢で、体重百十キログラムを目安に出荷され、母豚は肉となる子豚を生めない体であれば淘汰されます。家畜は、生産効率や経

済性を優先させ、生産能力がなくなり利益を得られなくなる
と寿命に関係なく淘汰されるのです。

私が担当しているブタである“アンズ”ももうすぐ初めての
の分娩を迎えます。でも、もし子食いなどの悪癖があれば経
済的な損失があり、生産能力がないとして淘汰されてしま
います。この子食いは、ブタが怖い思いを経験したことにより
神経質になってしまい起こるものです。この恐怖心を人が与
えなければ子食いはあまり起きません。

一方で、家畜は扱いやすい生き物でなくてはなりません。
そのため、時にはしつけや調教が必要で強い力を与えること
があります。外から見るとかわいそうと感じることもあるか
もしれませんが、調教ができていないと管理者がケガをする
可能性もあり、生産効率が悪く消費者が肉を安く買うことも
できません。

つまり安定した食肉生産のためには、家畜にストレスを与
えずしっかりと愛情を注いだ飼育をする必要があります。し
かし感情移入をしすぎることでは生産効率が悪くなり利益を得
られなくなるため、自分で線引きをしなくてはなりません。

アンズには足腰が強くなるようにと散歩をたくさんし、ス
トレスがたまらないように、人に恐怖心を持たないようにと
ブラッシングをし、多くの時間を一緒に過ごしました。アン
ズに密着するとどっしりとした心音がよく聞こえても愛お
しくなります。愛情をかければかけるほど応えてくれること
が嬉しくてたまりませんでした。しかしその反面、心の隅っ
こでは家畜なのにこんなに手をかけていいのか、こんなにア
ンズの事を大好きになっていいのか、と常に罪悪感がありま

した。

そうしているうちに「家畜とペット」という言葉を聞くと少しモヤッとする出来事がありました。アンズが散歩からなかなか戻りたがらずムチを使っていたとき、私のムチが弱く、先生から「ペットじゃないんだからね!」と言われました。別にアンズの事をペットだなんて一度も思ったこともないし今現在も思っていないんですけど、なんだか泣きそうになりました。今までも「ペットじゃない」という言葉は聞いていましたが、考え始めると難しく苦しくなるため考えることを避けていた自分がいました。しかし久しぶりに自分に向けて言われたこの一言が、家畜とペットの事について面と向かって考えるきっかけとなりました。

家畜とペットの一番の大きな違いは、人の手によって生きるか死ぬかが決められ、人に経済的な利益をもたらすかだと考えます。これを頭では分かっているけれども実際に家畜の世話をしてみると、悩んでしまうことが多くありました。考えれば考えるほど自問自答を繰り返すばかりで自分の考えは間違っているのか、畜産をやっていくのは向いていないではないかと考え込んでしまいました。

そこで実際に養豚場で働いていらっしゃる方に聞いてみました。家畜とペットで接し方は変わるか、何が違うのか、どう接すればいいのか、などの質問をしました。すると、「家畜もペットも愛情の注ぎ方は変わらないよ、たっぷり可愛がってやって」と言ってくれました。私はこの答えを聞いた時とてもホッと、今の自分の考えでもいいのかと思えました。さらに、友達と真剣に話し合ったり、先生に疑問

をぶつけてみたり、本を読んだりすると、様々な考え方があることがわかりました。

家畜とペットの違いを考えるのは、答えが見つからず苦しくなりますが、それ以上に面白いと思うようになりました。実際に養豚場で働いている方達は何を想っているのか、出荷は数をこなせば辛くないのかとたくさん知りたいことがあります。

そのため将来は私も畜産に携わる仕事、養豚を職業にしたいと思いました。そして自分なりの家畜とペットの違いの答えを出したいと思います。答えを見つけたら次のステップに移ります。それは私が農業高校生に養豚現場でのやりがいや葛藤を伝えるのです。今の私が養豚場の現場で働く方々の話を聞きたいと思ったように、同じ思いをしている将来の農業高校生はいるはずです。そんな彼ら彼女らに伝え、考える材料にしてもらうのです。そうすることで、本当の意味で養豚の魅力を感じてもらえるのではないのでしょうか。

これからも私は、「家畜とペットは違う」この言葉の意味を考え続け、将来につなげていきます。

分岐点

東京都立田無工業高等学校 三年

柿原美咲

私は、小学生の時に初めて建築に興味を持ちました。「ツリーハウス」と呼ばれる木の上の小屋を建てるイベントに参加したことがきっかけです。日本の伝統的な技法を用いて、大工さんと大きな丸太をのみで削ったり、土壁をこねたりしたときの感触を、高校三年生になった今でも鮮明に覚えています。

中学生になると建築への関心はますます高まり、将来は建築関係の仕事に就きたいと考えるようになりました。そこで、現在通っている工業高校の建築科に入学することを決めました。

入学当初は、建物を設計する仕事に興味があり、卒業後は大学に進学して、建築の設計やデザインの勉強をしようというところまで考えていました。

しかし、私が通う工業高校の進路はほとんどが就職なので、普通科の学校と比べると、大学受験に必要な科目の授業はあまり多くありません。そのため、足りない分を自分で補う必要がありました。自分だけの力ではなかなか思うように勉強がはかどらなかつたので、時にはインターネットの動画サイトで配信されている授業を活用するなど、自分なりに工夫し

て勉強していました。

そんな高校一年の春休みに、急に父が倒れました。お医者さんからは、仕事に復帰できるかどうか分からない、と言われ、私も家族もショックを受けました。

また、進路にも迷いが生じました。父が思うように動けない分、母が諸々の手続きや父の会社とのやりとりをしている間、私は家事の手伝いをしなければなりません。その結果、学校の勉強だけで手一杯になってしまい、それまで続けていた受験勉強をしている余裕がなくなってしまったのです。

このままでは大学入試に合格するのは難しいと感じました。また、家計の面でも厳しいと思いました。奨学金を申し込んだとしても、将来きちんと返済できるのだろうか、という心配もありました。

悩んだ末、私は進路の選択肢に「就職」を加えることにしました。先ほども述べたとおり、私が通う工業高校の進路は就職がメインです。二年生になればインターシップや「長期就業訓練」と呼ばれる職業体験活動に参加することもできます。私はそれらに挑戦することによって、それまであまり深く考えてこなかった自分の他の可能性を探ってみようと考えたのです。

そもそも、それまで私が興味を抱いていた設計の仕事のイメージとは、建物内の間取りや内装を考える、という程度のものでした。

ところが、学校に来ているたくさんの求人票を見ているうちに、それ以外にも数えきれないほどの魅力的な業種・

職種があることに気がつきました。それは、設計の仕事一つに絞られていた視野が一気に広がった瞬間でした。

私は、どうせ参加するなら複数の業種・職種を体験してみたいと思いました。そこで、大学進学を目指していたところから一転、インターシップと長期就業訓練の両方に参加することにしたのです。

活動の中で特に印象に残っているのが、一、二、三年次と継続して参加した長期就業訓練です。お世話になった企業に参加することを決めたのは、電気・水道・空調関係を専門に設計する仕事があると知ったことがきっかけでした。

就業訓練初日は、会社の理念、部門構成や、どのような建物を取り扱うのかなど、業務内容についての説明を受けました。企業の方と話すのは、普段気心の知れた学校の先生方と話すのとは全く違って、とても緊張しました。私のそんな様子を察してか、担当の方が学校生活やアルバイトなどの身近なことを質問してくださり、徐々に普段の自分を取り戻すことができました。

二日目以降は、パソコンで設計図を描く作業を体験しました。そこでは私が通う高校の卒業生の方が丁寧に教えてくださり、改めて先輩のありがたさを感じました。

設計図を描き進めていくうちに、空気の入口と出口がなくなり、建物の具体的なイメージが出来上がっていくのが分かりました。学校の実習で慣れていた手描きの製図ともまた違った感覚で、とても新鮮でした。慣れていくうちに作業のスピードも上がりましたが、仕上がった図をよく見てみると、細かいところにミスや見落としがあり、確認作業の大切さを

思い知りました。

また、ただ黙々と作業するのではなく、分からないところは質問するという積極的なコミュニケーションの大切さにも気づくことができました。そうすることで、より効率の良いやり方を教えていただくことができ、その後の作業をスムーズに進めることができました。

このような体験ができたおかげで、自分には一つの作業にこつこつと取り組む適性があるのだと分かり、自信が付きました。

これから先どうなるかはまだ分かりませんが、この長期就業訓練に参加したことが、人生の分岐点になっていることは確かだと思います。進路に対する悩みが、自分を成長させてくれました。

そう考えると、自分の視野を広げてくれたのは「困難」だったといえます。もし就職を選択肢に入れていなかったら、他の可能性を試さないまま、大学進学や設計の仕事だけにこだわって続けたと思うからです。

また、自分が一貫して建築に関わる仕事がしたいと考えてきたことにも気づきました。

状況に左右されることもありませんが、その思いだけは一度も変わるこ



となく持ち続けていました。この経験や思いを忘れることなく、将来自分が携わる建築の仕事の一つ一つを大切にしたいと思っています。

資源管理と漁村の活性化

東京都立大島海洋国際高等学校 三年

福田 祥太

私は、小中学生の頃から釣りや素潜り、漁船の手伝いなど海に関係した体験を多くして、早い段階から将来は海に関する基礎知識を学び、海に関連する仕事につきたいと思っていました。そのため東京都立大島海洋国際高校に進学し、水産海洋基礎や海洋環境の基礎を学んでいます。初めての寮生活では規則を厳格に守り、迅速に行動しなければならぬ団体生活に慣れるのが大変でした。しかしその中で友人の大切さを強く感じ、今まで当たり前に感じられていたことすべてが当たり前ではなく、何事にも感謝できる自分も発見することができたのです。

高校二年時の実習授業では一八日間の大島―沖縄―小笠原航海実習がありました。船員の一人としての乗船なので二四時間体制で臨み、海が好きなだけでは通用しない厳しい職業なのだ実感できました。船上でのすべての行動が乗船員の命にかかわる緊張状態が続くのです。実習を終えた時の大き

な充実感、今後多少の困難があっても乗り越えていける自信となりました。

乗船実習を終え、自分はどんな職業につきたいか考えたとき、船ではなく魚の資源管理についてもっと学びたいと感じ、高校の課題授業で資源管理について国内外の一般人を対象としたアンケート調査を行い、年齢・職種・国籍による認知度の違いをまとめました。アンケート結果を集計する中で日本国内の資源管理政策の認知度の低さを実感し、日本漁業の将来を見据え、国内のそれを向上させる方法について模索しています。

将来に向けてもう一つ大きなきっかけがあります。私は小学三年生から毎年夏に青森県深浦町に住む叔父が所有する大型定置網船に乗って漁の現場を体験してきました。毎年クロマグロをはじめブリやマダイなど大量に水揚げされています。しかし、二年前に叔父から定置網漁業について深刻な話を聞きました。その内容は、WCPFCの国際合意に基づき、二〇一五年一月に小型クロマグロの漁獲量を従来の半分にする措置が導入されたため、操業が難しくなったというものです。そのため叔父は小型マグロを水揚げしない工夫として、健全な状態で網外へ放流する技術を東京海洋大学と共同研究しています。これらの話から、私はクロマグロの漁獲や規制の現状について調査して、法律等から解決する方法があると考えました。また、漁で魚が獲れすぎたときも獲れなかったときも漁業従事者に安定した収入があり、魚の価格が高騰しすぎないシステム作りが大切であることも学びました。

以上の動機から、資源管理の研究のために今後自分に何

必要かを水産科の先生に相談し、資源管理について学べる大学への進学を目指しています。資源管理の専門家になるために必要な知識を学び、実際に漁村に滞在し、地域ごとの漁業の問題点だけでなく、漁村の復興や活性化の取り組みについて実践的に学んでいきたいです。漁業が復興することにより、叔父のいる青森県深浦町をはじめ、急速に過疎化の進む日本の漁業関連地域の活性化に繋がられると考え、非常に興味があります。具体的にはクロマグロ資源を保全するための政策の立案や、資源管理の現場を支え、資源回復を進めるために役立てるひとりの人材になりたいです。

またグローバルな広い視野を持つため水産政策を強化している国々へ留学を希望しています。特に私が魅力的に感じたのは、厳格な漁業政策によって水産資源の回復に成功しているノルウェーのような国への留学です。なぜならば、その国民の考え方や漁業政策、漁業管理について現地で学べるからです。またアジア諸国のようにこれから資源管理をしっかりとしなければならぬ国へ訪問し、各国の現状をしっかりと見据え、成功例や失敗例を参考に日本の資源管理に役立てたいです。

将来的には大学や大学院、留学で得た知識を生かし、クロマグロのみならず他の魚類や貝類の水産資源に関しても資源管理を行っていききたいです。水産資源として需要があり、資源量が減少を続ける多くの種に対して資源管理を行うことで持続可能な明るい漁業を目指します。海に囲まれた日本の過疎地域を活性化し、日本を昔のような漁業大国に戻すことが私の最終的な目標です。

高等学校の部 佳作

病院実習で学んだこと

愛国高等学校 三年

白川 葵

高校三年生になって、約半年間にわたる長い病院実習が始まりました。高校二年生のときとは違い、病院が変わり、グループメンバーが変わり、担当の教員も変わり、新しい環境でのスタートとなりました。その新しい環境で上手くやっていくのか、患者様と良い信頼関係を結ぶことが出来るのか、しっかりと記録を書くことが出来るのか、刻々と実習が近づくさしずつ緊張が高まってきました。

そして迎えた五月九日。遂に実習が始まりました。私のグループの最初の実習場所は、精神病院でした。今まで私は、精神疾患の患者様と実際に関わったことはないため、どのようにに接していけば良いのかがわからずに悩んでいました。

受け持ち患者様が決まり挨拶に伺ったとき、話し方がわからず、とても困りました。患者様は私が声をかければ返答はしてくれるものの、表情の変化が乏しく目線は時々下を向いて自信が無いような印象を受けました。患者様は何十年も前から精神疾患を患っており、色々な病院を転々として何度も入退院を繰り返し、自殺願望のあった方でした。そのため、会話の際は言葉を慎重に選びました。相手に余計な心配をか



けることの無いよう常に気を配りました。患者様と会話をしていると、途中「私じゃ無理よ。」「私はできないわ。」といった控えめなネガティブな発言を聞くことができました。そして、黙り込んでしまい、私と目を合わせようとしてくれなくなってしまったこともありました。私はとても困り、ため息が出そうになりました。

このようなときは、患者様にどのように声をかけたら良いのだろうか、それとも声をかけずにそっとしておいた方が良いのだろうか、とても悩みました。私は結局声をかけることができずに沈黙が続いてしまいました。すると突然、患者様は無言で立ち上がり、すたすたと自分の病室に戻ってしまいました。私は慌てて立ち上がり患者様の後を追いました。急いで病室へ行くと、患者様はベッドに腰掛けていました。枕元には白いラジカセとイヤホンがありました。床頭台とオーバーテーブルの上には、作業療法で作ったと思われる折り紙や絵などの作品が沢山並べられていました。私は初めて、患者様は普段ラジオを聴いていることや折り紙や塗り絵など作業療法に積極的に参加していることがわかりました。

ここにきてやっと患者様の普段の生活の様子について知ることが出来ました。私は今まで、患者様のことを何一つ理解していないまま接していたのだと感じました。患者様のことを何も知らない私が、上手くコミュニケーションをとることが出来る

わけがありません。これでは絶対に信頼関係を築いていくことは出来ない、そう考えた私はまずは患者様のことをよく理解していくようにしようと決めました。そのためには、患者様ももっと積極的に話すこと、それからよく観察することだと思いました。

あるとき、患者様が私に話してくれました。「私ね、人と比べて話が少ないでしょ。だから他の人によく怒っていると勘違いされちゃうのよ。本当は全然怒ってなんかいないのに。それが困るのよ。」と。それを聞いて私は、患者様は周りの目をすごく気にしていること。自分のことを勘違いされてしまった嫌な思いをしていることを知り、またそのことから人との関わりを避けてきてしまったのではないかと考えました。だからこそ、信頼関係を築きこの患者様が自分以外の人のことを少しずつ信用できるようにしていくこと。これが必要なのではないかと考えました。患者様が自分の思っていることを私に打ち明けてくれたことが本当に嬉しく思いました。お互いの信頼関係を築くための第一歩となりました。

実習中、患者様とトランプや折り紙、塗り絵やパズルなどで遊びながら過ごしました。最初の頃はただ一緒に遊んでいるだけでしたが、患者様のことをよく観察していくことにより、少しずつ性格がわかるようになりました。例えば、近くの他の入院患者様や学生と一緒にトランプゲームをするとき、患者様は積極的に配る行動が見られました。このことから、この方はリーダーシップのある方なのだと考えました。また、他の患者様が自分のトランプの手札からどのカードを出せばいいのか困っている際に、「あ、このカードが出せる

わよ。」と言って指差しながら教えてあげるといふ一面も見られました。私は、他者を思いやり助ける優しい心があることに気づきました。他にも塗り絵の塗り方がとてもきれいで丁寧なところ、色の使い方が美しいところ、折り紙の折り方が上手なところなど患者様の良いところを沢山発見できるようになりました。ゲームの途中で急に立ち上がりどこかへ行ってしまうところやとても飽きっぽくすぐにやめてしまうところなども同時に知りました。私は遊びの中から相手のことを知ることが出来ることを学びました。

実習最後の日、患者様は私に「今までありがとう。あなたは私の妹みたいなものよ。また会えるといいわね。」と言いました。その瞬間、私は涙が溢れそうになりましたが、必死にこらえ、実習中に沢山学ばせていただいたこと、受け持たせていただいたことに感謝の気持ちを込めて丁寧にお礼を言いました。

この実習の中で、精神疾患の症状や特徴について多くのことを学ぶことができ、内容の濃い充実した実習となりました。一番の大きな学びは、相手のことをよく理解し、信頼関係を築くことだと思いました。学校の授業だけではわからなかったことを、患者様と接することで学ぶことができました。この経験を忘れずに、あと半分の実習を乗り越え、准看護師試験に合格することができるよう頑張っていきたいと思います。

受け持ち患者様から学んだこと

愛国高等学校 三年

照屋 小町

「今までありがとうね。少しでも勉強になったかしら？」と言う四人目の受け持ち患者様に、指導者は「本当にありがとうございました。学生時代に受け持った患者様は大人になってもずっと覚えているものですよ。」と答えました。この言葉聞いて、私は不意に今まで受け持たせていただいた患者様を思い出しました。始まりは高校二年生の病院実習です。

一人目の受け持ち患者様であるA様は、発語が難しく、コミュニケーションをとることが困難な方でした。私が話しかけてもA様は応えることができないので、私は困りました。コミュニケーションをとりにいくたびに訪れる沈黙。気まずい気持ちになりました。今思えば言葉が話せなくても様々な方法でコミュニケーションをとることができるのですが、当時の私には「言葉こそがコミュニケーション」という思い込みがありました。しかし実習の日数を重ねていくうちに気が付いたことがありました。それは、私が質問をするのとたまに頷いてくれるのです。更に観察してみると、片手を動かしたり、口をぱくぱくしたりと私にサインを送っていたのです。A様は私にしっかりと訴えてくれていたのに、なぜ気付くことができなかったのかと、恥ずかしくなりました。それから

コミュニケーションの回数を増やし、声かけを積極的に行いました。しかし、ここで一つの問題にぶつかりました。それは「領きを全て信用してはいけない。」ということ。認知症の方の場合意味がよくわかっていなくても領いてしまうことがあります。だから領きだけを鵜呑みにはしない方がいいかな。」と指導者から教えていただいたのです。その後は領きも視野に入れつつボディタッチを多くすることにしました。手をさするだけでも関係は良好になったと思います。また、聴力には問題がないということから、私は自分の行動一つ一つをA様に伝えることにしました。「今から〇〇をします。」などです。また言葉での返事がなくてもA様は表情やちょっとした動きで私に返事してくれました。この実習で私はコミュニケーションの種類と方法を学ぶことができました。

二人目の受け持ちであるB様の第一印象は「少し怖そうだな。」というものでした。しかし、実際に関わらせていただく、ハキハキと話す方で、沢山話をしてくださいました。B様とのコミュニケーションは自然と長く続いたような気がします。これは、A様を受け持たせていただいたときにコミュニケーションの種類と方法を学ぶことができたお陰だと思えます。しかしまた問題が起きてしまいました。B様の退院予定が延期になってしまったのです。B様は退院することをとっても楽しみにしていて、退院予定日の前日も「今まで大変お世話になりました。これからも頑張ってね。」という言葉を送っていました。その日は金曜日でしたので、土曜日・月曜日に実習のない私はB様の退院を見届けることができた

くて寂しさを感じていました。しかし退院が延期になったため、火曜日にまた会うことができました。お会いできたことは私にとっては嬉しいことですが、B様にとっては悲しい出来事です。とても複雑な気持ちでした。「今までと同じように接してあげて。Bさんが退院のことに触れたら話してもいいけど、自分から退院の話はしないでね。」と指導者に言われました。ここで患者様とのコミュニケーションで触れてはいけない会話があることに気が付きました。誰にでも触れてほしくないことや話したくないことがあるのは当然です。私は指導者の言葉通りにできる限り同じように接しました。結局私の実習が終わるまでB様が退院することはありませんでしたが、私は三週間B様を受け持たせていただいた中で、患者様との会話の距離感を学ぶことができました。

三人目の受け持ちであるC様は精神病院に入院されている方でした。失礼な話ですが、私には少なからず偏見がありました。会話が成り立たないのではないかと勝手に思い込んでいたのです。しかし実際に病院に行ってみると、患者様は皆穏やかで、普通に会話することができました。私はC様や他の患者様に対して申し訳ない気持ちになりました。C様はそれを察したのか、「想像と全然ちがったでしょ？もっと叫んだり、暴れたりする人がいると思うかもしれないけど、ここにいる人は皆穏やかだよ。」と行ってくださいました。実際に自分の目で見ないとわからないことが沢山あると思いました。人から聞いた話や噂を鵜呑みにするだけでは思い込みや偏見を増長させるだけです。自分の目で確かめないと真実はわからないままだと、この実習を通して思いました。この実

習で私は思い込みや偏見などの色眼鏡で患者様を見るのではなく、ありのままの患者様を見つめることが大切だと学びました。―

「そうですね。忘れないと思います。」私は指導者と四人目の受け持ちの患者様にこう返しました。きっと私は学生時代に関わった患者様を忘れることは決してないでしょう。なぜなら、今の私の看護があるのは関わったすべての患者様のお陰だからです。本当に沢山のことを学ばせていただきました。私はきちんと感謝の気持ちを患者様に伝えることができたでしょう。関わることができたのはたった二、三週間でしたが、時間の長さは関係ありません。大切なのは相手を思う気持ちです。もしも、またお会いすることができたなら、精一杯の感謝の気持ちを言葉にして伝えたいという思いで一杯です。

馬中心の高校生生活

東京都立農芸高等学校 二年

松岡 翼

私が馬と出会ったのは、小学校の時である。父が馬に関する仕事をしていたこともあり、父の仕事場で乗馬を習うことになった。しかし、小学五年生だった私は、馬の世話でエサや水などの重い物をたくさん運ばなければならないなど、辛いこと

が多かったため、乗馬を習い始めて2年で、乗馬をやめてしまった。しばらく馬から離れてみると、馬に会いたい気持ちと馬に乗りたい気持ちでいっぱいになり、辞めたことをとても後悔した。

中学三年生になり、高校を選ぶ時には、乗馬クラブの先輩が本校の馬術部であったこともあり、一度学校見学に来た時、都立高校で唯一馬術部があることや、生徒が主体的に馬の管理をしていることに魅力を感じ、本校への入学を決めた。

馬術部には馬が2頭いて、生徒よりも馬が中心の365日休むことなく活動している。朝は、午前7時に厩舎に集合し、厩舎の清掃や、馬体のブラッシング、馬の給餌などを行う。その後、1時間目から授業を受け、昼休みには、自分の昼食よりも前に、厩舎に行き、馬にエサを与える。放課後は、馬の運動や馬体の管理、給餌をして一日が終了する。体を動かす作業が多いため、1年生の時は、授業中に眠くなることも多々あったが、今では授業と部活動を両立することができている。また、馬は自我をもっている動物であるため、人間の思い通りにならない時や、何がしたいのか分からない時もあり、馬の気持ちがいまいち分からない。特に、辛いことが多ければ多いほど、充実感を得ることができる。

私がこれまでの活動の中で、一番印象に残っていることは、今年の6月に行われた第51回全日本高等学校馬術競技大会関東地区予選において、全国大会への出場を決めたことである。団体戦であり、私は乗馬した馬のクセに上手く対応することができず、競技終了後は、自分が失敗したために全国大会への

出場を逃してしまったと思い込み、一緒に出場した先輩方に申し訳ない気持ちで一杯だった。しかし、先輩たちは「大丈夫だよ」「お疲れ様」と優しい言葉をかけてくれた。とてもうれしかった。私はこの時、これまでの苦労や疲れが一気に吹き飛び、馬術を続けていて本当に良かったと思った。これからもたくさん辛いことや、苦しいこともあると思うが、仲間と協力して乗り越えていく。

将来は馬の魅力を多くの人に伝える職業に就きたい。そのためには、今まで以上に馬の気持ち分かる人間にならなければならない。

私は、馬に会う時に必ず見るものがある。それは、目である。馬の目は、凛としていて優しげであり、目を見るたびに、私は落ち着いた気分になる。馬の目を見ると、馬が何をしたいのか、体調が良いのか、悪いのか、なんとなく分かるようになってきた。私は、馬と関わる中で、楽しかったこと、うれしかったこともたくさんあった。辛かったことも多かった。しかし、いつも馬や周りの仲間が支えてくれ、困難を乗り越えることができた。

今の目標は、馬術大会で優勝し、日本一になること。この夢を叶えるために、これから馬や馬術部の仲間と切磋琢磨していく。



牛を通して経済動物を学ぶ

東京都立農産高等学校 三年

岩 田 愛 彩

ことわざの中には、
「食べてすぐ寝ると牛になる」

というものがあり、行儀が悪いことを指しますが、実際牛は食後すぐには横になりません。加えて、睡眠時間が極めて短いことは牛が好きな人なら誰でもわかります。牛に限らず経済動物が含まれることわざや故事成語などには、経済動物に対して差別的、抽象的なものが多いです。そんな経済動物がいかに残酷な運命を辿って食卓に運ばれてくるのか、また、それを仕事にする農家の思いなども、私は多くの人に理解してもらいたいのです。

私が一年生の頃、夏休みに北海道の標津町で約一週間酪農体験をしたことがあります。体験先の農家の牛の頭数は、百十一頭のホルスタイン種で、たくさん牛達が雄大な自然の中で生活をしていました。私は、牛との触れ合いや乳搾りが出来るマザー牧場などには普段から行きますが、その牛達とはまた違い、ゆったりと暮らす牛の姿を見て、とても興奮したことを覚えています。一方、標津町での酪農体験では、仕事内容はエサ寄せと除糞を徹底することでしたが、何十キロもある糞を動かすことにとっても苦労しました。さらに、糞

の臭いと、エサの独特な臭いは、寝る時も頭から離れず、予想以上の慣れない仕事も重なり、二日目ですでに挫折しそうにもなりました。

そのような日々により嫌気をさしながらも、私が牛舎に入る度、牛達が一斉に私の顔を見ます。それはいつも過ごしている牛舎に面識のない私が来た事で、牛達が注目するからだ。と農家さんに教えていただきました。その話を聞いて、私たちも授業中知らない教員が後ろから入ってきたら、つい後ろを振り向いて確認する仕草と非常に似ていると思い、牛の行動が人間と重なって見える新しい発見がありました。また、エサが自分の柵から遠いところにある時は、舌を必死に伸ばして食べようとする姿にとっても癒され、自分の牛に対する愛情が高まったことで挫折を乗り越えることが出来ました。

そのような体験の中で、私は分娩後の子牛を見ることが出来ました。生まれたばかりにもかかわらず、一生懸命立ち上がろうとする姿と、わが子を舐めてきれいにする母親の姿を生で見る事が出来、貴重な体験と生命の力に、そこはかとなく感動しました。

しかし、感動しているのもつかの間、いきなり農家さんは、親子を引き離し、子牛を檻に入れ始め、

「この子はオスだったから、一週間後には肉になるんだよ。」とおっしゃいました。乳牛を扱い、乳製品を商売とする農家のため、オスはいつかは処分されてしまうことは理解していたのですが、肉が硬くなってしまいう前に子牛は出荷され、肉になる事実を目の当たりにし、あまりにもショックでした。その時の母牛の様子は、いきなり我が子を引き離されたこと

による、怒りと悲しみで絶叫に近い鳴き声を上げていました。それは、普段から「モー」と鳴くのどかな鳴き声からは考えられないもので、非常に怖かったです。また、新聞やニュースでも乳牛は搾乳量が原因で処分されてしまう事は知っていたので、自分の目の前で生まれたばかりの命を含め、牛達の儚い命に胸が苦しくなりました。

牛は人間の都合で家畜にされ、経済に利用される毎日を送っています。いつ、病気や搾乳量などが原因で処分されてしまうのかはわかりません。しかし、農家さんに、この仕事で喜びを感じる事を尋ねると、牛の日々の生活での変化だと語ってくださいました。その変化が仕事で一番大変なことであります。無事分娩をし、子牛が成長して周りに美味しい牛乳を届けられるほど立派に成長してくれることが何より嬉しいそうです。私たちはそんな牛の一生にありがたみを感じて、乳製品に限らず、命をいただいているすべての生命に対して、「いただきます。」「ごちそうさまでした。」「感謝を込めることはいくつになっても忘れずにいてもらいたいです。」

さて、これほど私達は牛からの命を頂いて今も健康に生活が送れているからには、

「牛を知るものは富む。」

というぐらい幸せな表現で牛のことわざなどが作られることを私は願ひ続けます。

「酪農」 素晴らしい経験・体験

東京都立農産高等学校 一年

上田 寛 敏

私は今年の夏休み、北海道の中標津町に人生初の「ある」体験をしに行きました。それは「酪農」です。私が在籍する都立農産高校が実施するインターンシップです。酪農家さんのお宅で一週間のファームステイをしました。参加した理由は、酪農体験を通じて牛たちと触れ合いたいということ、めったにない体験だと考えたからです。

私はこの体験に参加する前「酪農」と聞くと「ただ単に牛がいて牛乳を作っている。」や「テレビで起床が朝四時と聞き、起きるのが辛そう。」など想像していました。しかし、この一週間で酪農をすることで起こる様々なことを経験することによって今までの私の概念をすべて覆されました。これから二つのエピソードを書きたいと思います。

まず牛のコミュニケーションについてです。初めの頃は作業をしているときに牛の鳴き声を聞くと「なんか鳴いているな。」としか考えていませんでした。しかし牛たちを世話しているうちに「何で牛は鳴いているのだろう。」「何が言いたいのだろう。」と考えるようになりました。観察していると、なんとほとんどの牛が「モー」と鳴かず「ウンメー」と鳴いていることが分かりました。また餌をあげていると

きに牛の鳴き声に注意して聞いてみると「ウンメー」と鳴きます。それが「美味えー」と聞こえるというとても面白いことが分かりました。また、私が牛舎に入ると牛たちが鳴きます。なぜかと思ひ観察を続けると、「ご飯が欲しいから鳴いている。」ということに気づくことができました。また、初めの頃は牛の糞や尿をかなり気にしていました。しかし牛たちと接し仲良くなることで糞や尿を気にしなくなりました。よって、当然話す事ができない牛たちと時間をかけ十分に接し、観察することで牛たちとコミュニケーションをとれることを理解することができました。

次に牛の出産についてです。酪農家さんから誘われ牛の出産を手伝いました。私はそこで寂しさを感じました。生まれてきた子牛を母牛に舐めさせた後すぐに母と子を引き離してしまったからです。理由は母牛が子牛に乳をあげると子牛以外に牛乳を出さなくなり仕事に支障が出るからだそうです。引き離して子牛を別の牛舎に連れて行くとき母牛は離れていく子牛を見て鳴いていました。もし私が母牛だったら私は耐えがたかったことでしょう。もどかしくなり、とても寂しい気持ちになりました。別の日には雄牛が生まれました。僕はその牛の命名者となりました。鉄道が好きなので「トレイン」にしました。トレインは雄です。だから大人



になればお肉になってしまいます。名前を付けた牛が殺されてしまうと考えるととても悲しくなります。しかしこのお肉が食べる人みんなの命を育むものと考えると何か誇らしく思えます。初めての出産を手伝い目の当たりにすることによって生命の誕生にはうれしさと悲しさがあることが分かりました。

最後に、私はこの一週間で牛とのコミュニケーションの大切さや牛の生命の誕生の現実について沢山のことを学ぶことができました。また酪農作業以外でも今回滞在した中標津町の自然や酪農家さん一家の家族愛など、十分満喫することができました。今度は酪農体験以外の用事で、お世話になった酪農家さんにまたお伺いしたいなと思っています。

そして今回、私を引き受け、酪農を教えてくださいました酪農家さんやJAさん、行政などの支えによってこの北海道酪農体験が成り立っていると実感できました。酪農体験を通じて素晴らしい経験・体験ができてとても良かったです。

この一週間の出来事から、将来大学へ進学して、自分の好きな農業と新たに好きになった酪農を深く学びたいと考えました。

食品廃棄物を減らすことで救われる命

東京都立農産高等学校 二年

小野田 柚香

私は、食品廃棄物と、世界で起きている食料問題について意見を述べたいと思います。日本は農業生産物の質が良く、種類も豊富でとても美味しく豊かだと思います。その一方で、日本の食品廃棄率がとても高いという現実を知りました。

世界では食料不足で一日に、四から五万人が命を落としています。一年間では、千五百万人以上になります。私はこの事実を知った時衝撃を受けました。私はこのような事実をみんなが知り重大な問題であることを認識する必要があると思いました。私たちがなんとも思わずに食べ物を残して廃棄をしている中こんなにも多くの人が飢餓に苦しんでいるのです。

しかし、世界では人間が生きていくために必要な量の二倍の食料が生産されているそうです。しかし、世界の二割足らずの先進国に住む私たちが世界の穀物の半分以上を消費し、貧しい国では食料不足に悩まされています。日本では五千万トンの食料を輸入しながら千八百万トンの食料を廃棄しており、日本ほど大量に食料を輸入しながら廃棄を続けている国はないそうです。

私の中学校の給食では、自分のお皿によそわれたものすら残す人がいました。とてももったいないと思います。私は給食がおいしいと思うので残さず食べていました。しかし、人によっては給食で配られるものの量が多すぎたり、味の好みが合わなかったり、ただ単に好き嫌いが激しい人もいるかもしれないので、給食の廃棄をなくすためには様々な課題があると思います。また、友人から聞いた話ですが、ケーキ屋さんでは毎日ほぼ同じ量のケーキが売れ残り、持って帰れない分は廃棄してしまうそうです。これは、ショウウィンドウのケーキの見栄えを良くするためのものかもしれないし、他にも理由があるのかもしれませんが、私はとてももったいないことだと思います。

では、私たち日本ではどのようなことをしていくべきなのでしょう。まず、私たちの生活を見直すことが必要です。一つめは、無駄な買い物や食べ残しを減らしていくことです。自分たちに必要な分だけ買うことはさほど難しいことではないですし、そうすれば無理にダイエットをすることもなくなると思います。二つめは、国産品の物を選ぶことです。日本の食料自給率を増やすことができ、国産品が売れ、輸入品の需要が少なくなるため大量に輸入することがなくなり、食料の廃棄量を減らすことができるでしょう。三つめは、売れ残りによる廃棄を減らすことです。賞味期限の切れた食品は消費者に届くことなく廃棄されてしまいます。これはとてももったいないです。賞味期限が切れる直前、物によっては過ぎてしまっても、値引きをして販売し消費することで廃棄を減らすことができます。

以上の考えから私は無駄をなくすために、スーパーで賞味期限が近くなったパンやヨーグルトなどの加工品や、生鮮食品やお惣菜など値引きされている商品を積極的に購入しています。また、価格が安くても不必要なまとめ買いはしないようにしています。

しかし、私ひとりが思っていたり行動したりしていても日本の食品廃棄や世界の食料問題の現状は変わらないと思います。多くの人たちに今、日本がどれだけの食物を無駄にし、廃棄をしているのかを知ってもらう必要があります。そのためには、小学校、中学校の総合学習の時間などで食料問題や食品廃棄について考えてもらおう授業を行うことが良いと思います。そうすることで子どもの頃から知ることができます。その子どもが大人になり子どもに教えるというサイクルができれば、多くの人に知ってもらうことができますと思います。他にも、日本の食品廃棄や世界の食料問題について問題提示をするコマースシャルを放送することが良いと思います。テレビは多くの人が見るので多くの人の目に止まることでしょう。

私は、この作文がきっかけで食料問題について様々なことを考え、改めて日々の生活を見直すようになりました。食料のみならず、途上国での人口問題に至るまで、世界中の人々が平和で豊かな暮らしが送れるよう、一人ひとりが考えていかなければなりません。その一つとして、食品廃棄物の現状を取り上げました。身近なこと、小さなこと、一歩踏み出すことでかけがえのない命が救われることを信じています。

貢献できる生き方

東京都立瑞穂農芸高等学校 二年

春日 鈴音

『社会貢献』という言葉聞いて、何を思い浮かべるでしょうか。ある人は地域のゴミ拾いのボランティアに参加すること、またある人はコンビニで買い物をした後に店員さんから渡されたお釣りの小銭を寄付することを想像したかもしれません。それらに限った話ではなく、高齢者の方に電車で席を譲ることも立派な社会貢献でしょうし、社会の為に自分ができることを無償で奉仕することは、どれだけ些細な事でも社会貢献足り得るのではないのでしょうか。そう考えると、私たち学生が学校に通うことも、一つの社会に対する貢献かもしれません。私は、現在通っている高校で教室授業や動植物の管理実習を行うことでそれを強く実感しています。決して自ら地域のボランティア活動に積極的に取り組んでいる訳ではありませんが、社会の役に立てることを日々の授業で知ることができたのです。

自分がやりたいことをして、且つ社会の役に立つ。こんなに良いことは社会で生きていく上ではあまり無いかもしれませんが、とても充実していて楽しいものなのです。そして、自分の存在意義を確かめることができるのです。社会の役に立つ『社会貢献』することは、人生に付加価値を付ける

きっかけであり、生きがいになるのではないのでしょうか。

社会に出た人が仕事をする 것도、何らかのボランティア活動に参加することも、それら全て貢献感を得られるからだと思います。心理学者のアルフレッド・アドラーは、この貢献感を「公共に役立っている感覚」だと言っています。これは、自分のしていることが社会にとって有益であるときに、その行動に価値を感じるということのようなのです。例えば、傘職人は傘を作ることや修理をすること、その傘を売ることを仕事としています。しかし、その仕事は、社会にいる全ての人ができる訳ではありません。傘職人がいるからこそ雨の日に傘が使えるのでしょし、傘職人がいなくなると多くの人が困るでしょう。つまり、傘職人の仕事は、社会にとって有益であり、「公共に役立って」いて、貢献感を得ることができるようのです。そして、アドラーは貢献感を得た結果として、「自分に『価値がある』』と考えるようになる」と言っています。貢献感を得ることで、仕事をする自分に価値があると思えるようになり、仕事にやりがいを感じます。仕事にやりがいを感じた傘職人は人生に楽しみを見つけ、それだけでなく自信や勇気を身に付けることができます、生きがいを感じることができます。私もそれと同様に、勉強をすることで生きがいを感じることができているのです。そんな経験をしたことがある人は、私以外にも大勢いるのではないのでしょうか。

人の命になっているものを作っている、そう感じた時に、私は貢献感を得ることができています。そう感じることでできる出来事の一つに、文化祭があります。農業科と家庭



科が置かれた私の学校は、動物を間近で見られたり、学校で製造した本格的な食品が販売されていたりと、他校とは一味違った魅力で溢れています。その為、毎年沢山の人が訪れると以前から聞いており、祭当日も想像以上の人で賑わいます。驚いたことに、何十分もの待ち時間ができ、長蛇の列をつくる屋台もある程です。そして、自分が生産に関わったものが人間の口に運ばれる瞬間を目にし、感動したのを覚えています。普段、野菜は収穫したらその後の販売までの過程を見られませんが、集めた鶏卵もパック詰めされる瞬間を、搾った牛乳が工場に運ばれて加工・販売される場面を、そして手に取って頂いた人の顔も、例え生産者であっても見ることは難しいのです。しかし、文化祭では自分たちが生産に関わった農産物が人間の口に運ばれるまでを見られるのです。

一年生だった私は、直接生産に関わっていることは少なかったのですが、それでも多くの人に命が渡る瞬間と喜んだ顔を見られ、生きていて良かったと実感できたのです。私でも人の命に繋がる事が出来るのだと、学校に通い動植物の管理や勉強をするこ
とへの強いやりがいと喜び、そして自分の存在意義を心の底から感じたのです。

現在の私の生きがいは、動物の管理や実習、勉強を通して新たな

知識や経験を取り込むことです。この学校に通える“限りある時間”の中で、これらの生きがいを十分に感じながら生命の誕生や行動をじっくり研究し、人や動物の命を支える仕事、貢献感を得ることが出来る仕事について考えていきます。

これからも社会に貢献できるような人生を歩んでいきたい、これが今の私の思いであり、人生に課すテーマです。

考えよう！命の大切さについて

東京都立瑞穂農芸高等学校 三年

原 田 未 崎

突然だが、私たちが生きる為に何が必要だろうか。

水や空気、住む場所、着る物。そして食べ物。当たり前な事のように思えるが、決してそうではない。それらなどが合わさり、私たちが今生きているのだと考える。その中でも私は「食べる」という事の大切さについて思う事がある。私たちが何かを食べるという事は、動物や植物の命を頂いているという事実。また命を頂く事によって私たちは生きていくという現実があるのだ。その命は、私たちの命と同様に一つしかない。これは当たり前な事であり、重要なことでもある。私は幼い頃から、「食べ物を食べる時は『いただきます』と言って食べ終わったら『ごちそうさま』

でした』と言うように」と、両親や祖父母に教えてもらった。しかし、本格的に命の大切さや「いただきます」、「ごちそうさまでした」の意味・大切さにはまだ気が付いていなかったのだ。なぜなら、当時は食卓にある料理を見ても、命を感じる事が出来なかったからである。だから、両親や祖父母に教えてもらっても、何となくの「いただきます」、「ごちそうさまでした」しか言っていなかった。だが、ある体験をする事によって命の大切さについて考えるようになった。それは私が高校に入学してからの事である。

一年生の時、「農業と環境」という授業があり、その中の実習で野菜を栽培した時の事であった。私は今まで野菜を栽培した事が無かったので、上手く野菜を育てる事が出来るか不安だった。初めての一つ一つの作業はとても長く感じた。ある時は先生に「作業が遅い」と注意をされたり、また一つの失敗で上手く育たなかったなどがあった。しかし、先生の注意・指導のおかげで、育てた野菜は甘みがあり鮮やかな色をしていた。私はその授業によって、たとえ小さな一つのミスでも後に影響が出るという事を学んだ。また同時に命の大切さについて感じる事が出来た。今までの私は、野菜はスーパーやコンビニで沢山売っているからという理由で何となく食べてきた。野菜は当たり前のように育つ物だと思っていた。しかし、授業を受けた事によって、野菜を栽培する難しさを学んだ。かん水や追肥などを行っても、100%育つとは限らないと知る事もできた。野菜の生産者は広い土地の中で苦労しながらも私たちの為に栽培していると感じる事も出来た。私は苦労しながら栽培し

て下さっている方に対して、感謝の意味を込め「いただきます」と言って食べるようにしたいと思うようになった。皆さんも生産者の気持ちを考えながら食べてみてはどうだろうか。そうする事によって、野菜の大切さが分かりきつと苦手な物も克服出来るようになると思う。

この体験以外にも命の大切さを感じた事がある。それは二年生の総合実習の一環として受けた「と畜」の授業である。「と畜」とは、食用として育てられた家畜が、私たちに食べられる為に殺されてしまう事である。今回は鶏の「と畜」を見学した。と畜をする部屋に入ると、1羽の鶏が牢の中に入れられていた。これから殺されてしまうのに静かだった。しかし牢から出されると、鶏は大きな声で鳴き始め、私たちに助けを求めているような感じだった。ナイフを使って首の頸動脈を切り、放血器に入れられると、鶏は大きく暴れ出した。「痛い」より「死にたくない」という気持ちの方が強かったのかもしれない。だから暴れたのだと私は思う。鶏から出た血は鮮やかな赤色で、独特な匂いがした。そして徐々に動かなくなりこの世を去った。そう、私たちの為にこの世を去ってしまったのだ。私は残酷な光景に、驚きと恐怖を感じた。食卓に出ている鶏肉が、このような過程を得て私たちの為に犠牲になってしまふという悲しみも感じた。しかし、この過程があるから私たちは食べる事が出来るという現実がある。私はこの事から、犠牲となった動物の為に食べ物大切にしなければいけないと思った。

だが私たちは、肉ばかり食べている訳では無い。動物と

同様に植物の命も貰っているのだ。畑で栽培された野菜や果実、野山に自生する山菜や魚など…。他にも「味噌」や「醤油」、「酒」、「ヨーグルト」などに含まれている微生物にも命がある。そう考えると、私たちは様々な命を頂いて生きている事がわかる。そのような事を私は他の人に伝えていく事が重要なのではないかと思っている。そう考えていると、命について詳しく学べるのは農業高校ならではの強みなのかもしれない。

私は、多くの人たちが食べ物に対して感謝の気持ちを持ってもらい、何となくあるものという考えをなくしてほしいと思っている。だからこそ、一人でも多くの人に「いただきます」と「ごちそうさまでした」の意味、そして「命」について考えてほしいのだ。

私の目指す、将来の伊豆大島

東京都立大島高等学校 三年

今 江 一 詩

私の住む伊豆大島は、東京都から一番近い位置にある活火山の島です。主な農産物はアシタバ、サツマイモ、観葉植物、最近ではバルディアなど切り花の生産にも力をいれています。一番有名な特産品は椿で、椿油は江戸時代から作られています。また、ツバキをはじめサクラやミズキな

どは薪炭として江戸や東京に船で運んでいました。

そんな伊豆大島ですが、近年は観光客の減少が問題になっています。来島者数は40年前の約3割になっています。

伊豆大島は、戦前と戦後2回観光客が増えた時代があります。最初は昭和のはじめ頃、三原山と椿油が大変有名になり、多くの人が訪れたそうです。次は約40年前の離島ブームの頃、多くの若者が来島しました。

その頃は島の人口は1万2千人を超え、観光業と共に農業も漁業も元気でした。

しかし現在の伊豆大島の人口は8千人を切り、高齢化も進んでいます。

伊豆大島のかつての観光ブームは自分たちでしかけたものではありません。東京から近い活火山、戦後豊かになりはじめた頃の若者たちの手頃な旅行先として、たまたま注目されたものです。なので観光客を増やすためには施設設備の整備やインフラの整備、積極的な情報発信など、主体的に魅力を伝え、人を呼び込む努力をしないといけないと私は考えています。

伊豆大島は山と海があり島特有の数々の資源があります。それらは観光だけでなく、様々な産業に活用できるものです。しかし、海の水産業も山の農林業も日本全体と同じように海外の安い生産品におされ、一次産業に従事する人はわずかで、さらに高齢化も進んでいます。島から本土に出荷するには運賃が余分にかかることもあり、同じものを生産しても競争になりません。そこで私は、資源を伊豆大島ならではの、という付加価値をつけて活用することに注目

しています。その鍵になるのはツバキです。

伊豆大島にはヤブツバキが約300万本自生していると言われており、さらに国際優秀つばき園が三ヶ所もあるからです。「あんこ椿と恋の花」でも知られる通り、伊豆大島といえばツバキというイメージは既に国内に定着しています。

国際優秀つばき園認定へ向けた取り組みは、本校だけでなく都立大島公園椿園、民間の椿花ガーデンと3園で連携し同時申請しました。島の産官学連携として注目され、たくさん取材も受けました。そして2016年2月に3園とも認定されました。取り組みを通じて地域の方や島外の専門家の方々など多くの方々の話を聞くことができました。その中で、ツバキは花だけでなく、葉や幹や枝や果実、さらには灰まで捨てる場所がない有用植物だと知りました。自分たちの住む伊豆大島にたくさんあるのも決して自然にあるのではなく、昔から島民の生活に密着しており、守られてきていたと知りました。

また、2年生のときには大変多くの観光客が学校にも来てくださり、私たちは何度も椿ガイドを実施しました。時には外国の方もお迎えしました。世界中から伊豆大島に観光客が来てくれるようになることは決して悪いことではないと思います。さらに、大島には私たちも管理に協力している樹齢300年とされる「仙寿椿」のような古木もあり、椿園のみならずツバキの里山の風景も楽しむことができます。私はこれらを最大限に活用すれば、観光のみならず様々な産業に利用できると考えています。

椿は、種で油を絞れ、花は鑑賞用として、樹木は炭や薪

などに変えられ、そして防風林として利用されています。

椿林は伊豆大島の典型的な二次林で、種や炭薪材など様々な恵みをもたらしてくれます。大島の気候風土に合った植物なので生育も非常に良好です。

しかし、現在管理が行き届かない椿林も増えています。そのような林は木が大きくなりすぎて花付きも悪くなり、林床も荒れて種子も収穫できなくなっています。

樹高を収穫しやすい高さにコントロールし、大きくなった木は剪定もしくは伐採し材として利用する。300万本と言われる伊豆大島のツバキをこのように活用すれば、十分に産業として成立すると思います。

産業とするためには作るだけでなく、作ったものが売れなければなりません。椿油はオレイン酸を豊富に含み、酸化しにくい大変高品質な油であることは科学的に証明されています。ただ手間がかかるので、他の油に比べて高価です。

しかし質が良いものは高価でも売れるのです。椿の炭も同じです。椿炭は昔から大名屋敷で用いられたそうで、日持ちが良く、灰も立ちにくい美しい炭として評価されていました。現在は需要が落ち込んでいますが、最近これが見直され再生しようという動きがあります。



椿の良さを多くの人に知ってもらうために、どのような戦略をたてるかが今後の課題だと考えています。安く大量にでなく、量が少なくても自信をもって売れる商品を作る知識と技術を確立することが、私の将来の伊豆大島を目指す第一歩だと考えています。

たった一つの目標

東京都立小金井工業高等学校 三年

小野 幸 帆

私は中学二年から不登校になりました。今は、たった一つの目標を持ち、高校生活を楽しんでいきます。

不登校のきっかけは、欠席が増えたことです。私は六歳の時、良性の脳腫瘍で下垂体を全摘出し、ホルモンを薬で補っているため、体調が安定しづらいのです。姉に憧れ、姉を目指して吹奏楽部に入り、姉のようになりたいと思っていますが、夏になると入退院を繰り返し、部活動に参加しづらくなりました。

入院は半月ほどかかることもあり、一人だけ違う世界にいる感じがとても怖かったです。そして、久しぶりに学校へ行くと過呼吸を起こすようになりました。授業も分からず、友達の話にもついていけないだろうという想像が膨ら

み、生徒を見るのが怖くなりました。学校に着くと正門から教室まで歩けず、保健室登校になりました。保健室では自習をし、時々保健の先生に勉強を教えていただきました。保健室には小学校からの友達もいて、勉強を教え合いました。

そのうち、「姉のようになる」目標をやめよう、ここまでくると人と同じように人生を送ることはできないと思い、自分なりに生きようと決めました。今から考えると、これはとても良い転機だったと思います。

中学三年になる少し前、保健室登校で仲の良かった先輩が、手紙をくれました。手紙の中には、自分が苦労してきた話と、私への心配が書かれていました。「私は高校へ進学するけど、小野さんのことが心配です。話せる人がいなくなると思って。」とありました。涙が出ました。私は、それまで不登校のことを両親に話せずにいましたが、この手紙に勇気をもって打ち明けました。両親は驚いたようでしたが、受け容れてくれて、「私は生きている」という気持ちで、こみ上げてきました。それまでは隠れて生活している気分、学校へ行く時も、人と会わないように畑の中を通っていました。両親に話してからは、保健室登校は続きましたが、通学路を通って学校へ行くようになりました。

それから、高校受験について悩む余裕が生まれました。保健室では自習はできても分からないことが多く、このままでは高校に行けないと思い、特別支援学校に転校することになりました。そこでは、自習が中心でしたが、丁寧に勉強を教えてもらえました。友達もできて楽しかったのです。

が、高校への不安は高まっていきました。中学と違って義務教育ではないと知っていたので、毎日学校へ通えるか、皆と同じようにノルマを超えられるか、とても不安でした。

やりたいこともなく、高校はどこへ行こうか悩みました。体調を安定させることが学校を続けるためには大事だと思い、中学を振り返ると、暑さで体調が不安定になると分かりましたので、夜間高校を選択しようと思いました。そして、小金井工業高校の体験入学に参加しました。初めてはんだごてを使いLEDライトを作ったことがとても楽しく、私は「物作り」が楽しいと発見しました。それまで買っていた商品が作れるのだという驚きもありました。

小金井工業に行こうと決めました。その時の大きな不安は、集団生活に慣れずにすぐに学校をやめたくなるのでは？ということでした。それだけは避けたいと思い、たった一つ目標を決めました。それは「卒業する。」です。健康な人にとっでは当たり前で、目標にはならないかもしれませんが。でも中学を三分の一以上行けなかった私には、大きな目標です。例えば友達が一人もできなかったとしても、「私の目標は卒業」と思って学校に行く。そして、この目標をいつでも思い出せるよう、自分宛に手紙を書きました。未来のやめたくなくなった自分に「やめてどうするの！卒業するんでしょ」という励ましと叱る言葉を書きました。この手紙は今でも私の支えになっています。

クラスで女子は一人だけという中で、高校生活が始まりました。入学前はたくさんの不安がありました。先生方の配慮もあって、思ったほどのハードルを感じることなく

学校へ行くことができました。今は学校生活をおくれていることに幸せを感じています。

最近、私が楽しんでいることは、アクセサリー制作です。物作りが好きになったので、レジンを使ったアクセサリーの制作を始めました。レジンとは紫外線に反応して硬化する樹脂で、イヤリング、ストラップなど自分でデザインを考えて作ります。売っているものを買うのは簡単ですが、自分で可愛いと思うものを考え、工夫しながら作ることはとても楽しいです。作ったものを家族に見せると「可愛い！」と言ってくれることも嬉しく、また、家族と一緒に考え合えることも、買うことは違う楽しさです。

作ったアクセサリーはハンドメイドのオンラインショップで販売しています。商品の説明や価格、送料などすべて自分で調べながら設定しました。初めて一つ商品が売れた時、とても嬉しかったです。喜んでもらえるかなと思いつながら作るのは緊張感もありますが、これまで自分の為だけに作っていた時とは違った楽しさがあります。丁寧に作り発送しています。

保健室登校と特別支援学校に行ったことは、自分なりに考え工夫して行動することに繋がっていると思います。今から考えるとどんなことでも、今の自分の支えになっているのかもしれませんが。

人と比べず、自分なりの目標を一つだけ決めること。欲張らず、急がず、自分のペースで。それが、今までの生活と工業高校で学び、物作りを続ける事から得たものです。これからも、それを一つずつ積み重ねたいと思っています。

持続性

東京都立小金井工業高等学校 一年

川崎スイモン利文

「この学校に来てよかったなあ。」

時々頭の中でそんなことを考えている回数が、増えたように思う。

私は高校一年生だが、年齢は他の生徒たちより少し上で、ヨーロッパに行くとお酒が飲める年齢だ。もちろん飲まないが。

私は生まれも育ちも海外で、日本に来たのは三、四年前だ。ただし、海外育ちには珍しく、日本語の方が第一外国語である。

「この学校に来てよかった。」

まだ一学期間しか通ってないのにこの感情が湧き出るようになったのは、小金井工業が恵まれた学校であるからだ。きれいな校舎、整った設備、やさしい先生や先輩方。ここまでの良い学校が他にあるだろうかと思っている。

先生方の熱心な指導に触れ、自分ももっとがんばらなくては、という気持ち自然と湧き出てくる。

もともと勉強が苦手であった私だが、高校に来てからは、全ての授業を通して、学ぶ姿勢を身につけることができた。

もちろん、工業高校なので、教室での授業以外に実習が

ある。私は機械科で、一学期は旋盤の実習があった。工業高校ならではの作業で、大半が初めてやることばかりである。

例えば、バイトという鉄を削るための刃物を旋盤に取り付け、鉄を回しながらバイトでゆっくりと鉄を削っていく作業がある。地味ではあるが、徐々に鉄の形が変わっていくのが楽しい。自分の子どもを育てていくのはこんな感じだろうかと思うような感覚を覚える。

できあがった作品は、自分の家に持ち帰っても、学校に預けても良い。もちろん先生は持ち帰ってほしいと思っているだろうが、何人かの生徒は学校に預けたままにする。自分の作品を嫌々受け取っている生徒もいる。自分の作品を大事にできないように見える光景を目にして、もともと、自分の作った物には愛着が湧く私は、心の中で少し悲しいと震えてしまった。でも、いつも気にしていると辛いので、この頃は、できるだけそのことは忘れるようにしている。

今、夏休みのまったただ中だ。暑い日々が続き毎日参ってしまいそうになる。部活動もあり、熱中症にかかりそうになったこともある。それでも授業がある時期よりは余裕がある。余裕があるのは有難いが、長い休み中は、ともすれば、自分のやる気が入りにくくなっていく。このままでは二学期はかなり苦戦するだろうと心配になることもある。そこで、最近は、部活動がない時も学校に行ったり、用事がないくても、つとめて外出したりするようにしている。そうすること、ある程度モチベーションを維持することができるようになった。

学校は学ぶ場であり、やる気は必要不可欠である。特に高校に入学してからは、甘えをできるだけなくしてこうと努力している。

私はまだ、将来何になりたいか決められない。しかし、高校生活に、やる気を持って臨み、やる気を持続させることができれば、将来進むべき道もおのずと見えてくるだろう。旋盤の授業で鉄を丁寧削り続けられれば、あるべき形が現れ出てきたように。

私が高校に入学して学んだことは「持続は力になる」です。



日本での生活で学んだこと

東京都立田無工業高等学校 三年

瀬谷 イアン

私はフィリピンで生まれ育ち、六年前に日本に来ました。現在は工業高校に通っています。

日本に来たばかりの頃は言葉が分からなくて大変でした。そこで私は、日本語を勉強するために日本語学級がある中学校に入学しました。日本語学級とは、一日六時間ある授業のうち二、三時間を日本語の学習にあてる学級です。その他の時間は共通の授業になるのですが、最初のうちはついていくのがとても大変でした。

そこでは一から文字の読み書きを勉強しました。最初は平仮名の練習、ものの名前、言葉の意味を覚えましたが、二カ月くらいから少しずつ漢字の勉強を始めましたが、読み方がいくつもあったり、書き方が複雑だったりして、なかなか思うように覚えられず苦労しました。学校での勉強だけではとても追いつかなかったので、自宅でも自分なりに工夫して勉強しました。

そんな地道な努力のおかげで、日常レベルの日本語には慣れてきたのですが、将来本当にこの国で生活していけるのかどうか心配でした。

中学卒業後の進路として工業高校を選んだのも、それを

考えてのことでした。工業高校の就職率の高さは、日本で自立して生きていくことを目指していた私にとって、大きな魅力でした。

日本語を頑張って勉強したことが評価され、中学校から推薦をもらうことができたので、推薦入試に挑戦しました。当日はとても緊張しましたが、言葉も大体理解できて、面接試験でもきちんと受け答えすることができました。合格した時の喜びは今でも忘れられません。

高校では、インターンシップや「長期就業訓練」に参加しようと思いました。最初は就職に有利になるのなら、という程度の軽い気持ちでした。

就職試験では、自分の苦手な作文を書かなければならないうことがあると聞いていたので、参加することによってこの弱点を補えるのではないかと考えていました。まずは自分が会社や仕事のことをよく知り、会社の人には日本語がまだ十分ではない自分のことをよく知ってもらおう。学校の先生には、就職を簡単に考えすぎだと言われましたが、就職前にそういうことができれば、作文がうまく書けなくても、自分の気持ちが会社に伝わりやすいのではないかと思いました。

活動中の一番の思い出は、本来なら社会人にならないと経験できない実際の仕事に挑戦できたことです。現場での朝礼、CADを使った材料計算、取引先の企業に見積もり依頼や発注をするための電話など、何もかもが初めての体験でした。

私は建築の勉強をしています、学校の実習では使った

ことのない道具もたくさん使いました。実際に建てている途中の現場でしか見られないものもたくさんありました。

もちろん、大変なこともたくさんありました。いつもより朝が早いことにはとても苦労しました。社会人になったら仕事に責任を持たないといけないので、今のうちから早起きに慣れておかなければならないと思いました。

また、敬語にも苦労しました。いまだにうまく使いこなすことができません。日本の大切な文化だと思うので、もっと勉強して、社会人として恥ずかしくない言葉遣いができるようになりたいです。

そんな私でしたが、二年生の時のインターンシップ、その後三回の長期就業訓練に参加し、四回も同じ会社に行かせてもらいました。回を重ねるごとに会社の雰囲気慣れ、社員の方々とも打ち解けて接することができるようになりました。

施工管理の仕事を体験したいと思ったのは、一年生の時の建築模型を作る授業がきっかけです。その時、私は班のリーダーとして、他のメンバーに指示を出し、何か問題が起きた時には解決策を考えなければならぬ立場でした。慌てたり困ったりしながらも、何とか模型を作り続ける私の様子を見ていた先生が、施工管理の仕事が向いているかもしれないと声をかけてくれたのです。

それをきっかけに、資格にも挑戦しました。家計を助けるためにアルバイトもしているため、最初は試験勉強の時間がうまくとれるか心配でした。しかし、通学中の電車内で参考書を読んだり、過去問を解いたりするなど、時間を

うまく使うことを覚えました。いつもより早く起き、学校での早朝講習にも参加しました。時にはアルバイトの休憩時間も利用しました。専門用語の中には読めない漢字がいくつも出てきて、その度に立ち止まって調べる必要がありました。

苦労はしましたが、おかげで二級建築施工管理技術検定の学科試験に合格することができました。実技試験にも合格できるよう頑張りたいと思います。

日本に来てからの経験から、いくつか学んだことがあります。

一つは、その国で勉強して生きていくために語学学習がとても大切であることです。

もう一つは、一生懸命勉強したことが、生きる自信につながるということです。日本語を一生懸命勉強したことで、工業高校に入学し、職業体験に参加することができました。このことが、日本で生きていくことに対して自信を持たせてくれました。

この経験を生かして、高校卒業後は、日本で信頼される仕事ができる社会人になりたいです。そして、いつか自分の家を建てて、そこで生活することが現在の私の夢です。

乗船実習で出会ったマチ類と耳石

東京都立大島海洋国際高等学校 三年

柳 田 有 斗

マチ類という魚を知っていますか。この魚たちとの出会いが私に大きな影響を与えてくれました。私の高校では、授業の一環として乗船実習というものがあります。この乗船は、大島↓東京↓沖縄↓小笠原諸島父島↓大島間を計18日間で航海しました。航海当直中に船酔いや眠気に負けて、突っ伏したりしてしまいました。当時船員を目指していた私は「柳田！シャキッとしろ！そんなので船員なんかになれるか！」とよく教官や船員さんに怒られたことを覚えています。しかし、そんな私を励ましたり、補助してくれる仲間と共に過ごせたこの18日間は私にとって非常に良い経験となりました。乗船の途中、小笠原近海で漁業体験という目的で底釣り実習をしました。この体験が、私が本気で取り組みたいテーマへと導いてくれました。底釣りとは、水深100〜300mの海底付近にいる魚をターゲットにした釣りです。小笠原の沖合は海がとても青々としていて、海鳥も多くいました。私が普段の大島の波浮港でしているような釣りとは全てが違いました。竿、電動リール、針、てんびん、おもり、何から何まで見たこともない大きさを、餌はサンマとイカを使い、それらを7つの針につけて一気に海底に

落とします。電動リールに表示されている水深とブリッジから放送される水深を合わせ、魚が掛かるのを待ちます。魚が掛かったと判断したら電動リールのボタンを押し、上がってくるのを待ちます。上がってきたときに魚影が見えるとともに嬉しいです。50〜60cm以上のものが釣れ、周りでもどんどん釣れて、驚きの連続でした。

その晩に、船員さんが私たちが釣った魚たちを刺身やあら汁などにして出してくれました。自分たちがその日に釣った魚を食べると

いう貴重な経験で、そしてなによりおいしくて、あの味は忘れられません。それと同時に魚たちの命をもらうということを強く実感しました。次の日に底釣りで使った竿やリールなどの漁具を磨き、片付けている時に船員さんたちが「きのうは昔と比べたら全然釣れてないんだぞ。昔はこんなものじゃなかった。」と教えてくれました。自分としてはたくさん釣れていると思うていた釣りが、昔と比べると全然釣れていなかったということに衝撃を受けました。

そこで私は、本当に釣れなくなったのか、他の海域でもこの魚は釣れなくなったのかなどが気になり、調べてみることにしました。底釣りで釣れた魚はオオヒメという魚で、水産物の流通名はマチ類として分類されます。マチ類の中



でも特に水産上重要な魚類がマチ類主要4種と呼ばれ、ハマダイ、ヒメダイ、アオダイ、そしてオオヒメの4種となります。マチ類は鹿児島、沖縄、小笠原近海でのみ漁獲されます。地元でも高級魚として多くの人々に親しまれ、刺身はもちろん、鍋が絶品で冬には値段が上がるそうです。これらマチ類の漁獲量のデータを調べると、どの海域でも漁獲量が減少していることが判明しました。この現状を知った私は、マチ類の資源を枯渇させず、今後も漁師が安定して漁獲し、この美味しい魚を私たちがずっと食べ続けられる方法について探すことに決めました。マチ類も最近注目されているマグロ類等と同じように資源管理をすることで、この資源を回復できると考え、3学年になった今、課題研究のテーマとしてマチ類の資源管理方法について調べています。資源管理をするためには、禁漁区を設け、禁漁をする必要があります。禁漁をするにあたって、どのようなサイズ、年齢、季節、場所にするかを決めなければいけません。なぜならば、成熟している個体を漁獲してしまうと次の世代の魚を残すことができません。次の世代を残すためには、産卵が重要になってきます。そのため、成熟した個体を守るために成熟年齢、成熟サイズ、産卵場所、産卵期を知らなければなりません。そこで、耳石が活躍します。耳石とは、魚の平衡感覚を司る器官です。耳石は魚の成長と共に輪紋が形成されるため、その魚の年齢を知ることができます。魚は季節によって成長の度合いが変わります。体の成長がいい時期は輪紋の間隔が広くなるので、色が薄くなります。体の成長が悪いと、輪紋は間隔が狭まり、密集する

ので色が濃くなります。このような季節のサイクルがあるので成長が悪い時期と良い時期でワンセット、つまり1年と考えると、魚の年齢が分かってきます。年齢がわかれば、その魚の生殖腺を調べることにより、成熟年齢、成熟サイズがわかります。耳石のすごいところは年齢がわかるという点だけではありません。E P M Aという最新の機械にかけることによって微量元素を測定することができます。微量元素がわかると、その魚がいつどのような海域にいたのかなどがわかるので、その魚の回遊生態などを知ることができます。この輪紋と微量元素の2つを知ること、産卵期、産卵場所まで知ることができます。これらのデータをもとに禁漁期や禁漁区をつくるのが大切です。これらのことを大学の研究室にお邪魔させてもらい、大学院生たちに教えてもらって一緒に研究させてもらいました。とてもいい経験となりました。

私は乗船実習で船員さんに昔より釣れなくなったと言われたので、将来はマチ類の資源を回復させ、水産教員になって母校の乗船実習に参加し、昔より釣れるようになったと言いたいのです。そのために大学に進学し、実習船を使うような実習をたくさんしたいです。

私の将来の夢

国際理容美容専門学校（美容高等科） 一年

村 野 萌

私の将来の夢は、美容師になることです。特に若い世代の人達に必要とされるようなヘアスタイリングができるような美容師になりたいです。

なぜ若い世代の人達に必要とされる美容師になりたいかという、ある一人の美容師さんに憧れをもったからです。その人は、自分の作品をたくさんSNSに載せています。その作品は、どれも他の人とは違う輝きを持っているように見えます。実際にその美容師さんに髪を切ってもらった時、その人がどんな髪型が似合うかや、毛質に応じたヘアケアの仕方など、客側が退屈にならない接客をしてくれました。その人が作品をつくる上で、一番大切にしていることは、写真に写る髪シルエットだと言っていました。できあがったヘアスタイリングを撮ってもらう時、色々な角度から撮ってもらいました。何度も髪を直しながら撮影してくれて、その日寝るのがもったいなくらいでした。自分のそう思う気持ちを将来誰かにしてあげられるような技術を身に付けたいと思いました。そして、その美容師さんのように若い世代に支持されるような時代の先端を行く美容師になりたいです。

もし私が美容師になれたら、この人に切ってもらいたいと言われるような美容師になりたいです。美容師は、一日中座れない、シザースなどの道具の値段が高い、パーマやシャンプーなどで手が荒れてしまう。大変なことを言えば続々と出てきますが、お客さんが喜ぶ姿を直接見ることができるのが美容師という職業です。いつか私が仕上げた髪型を笑顔で「ありがとう」と言ってもらえるようになります。

この夢を叶えるためには、今通っている学校で勉強をして、国家資格を取ることが必要です。今まで私は自分がやりたいこととやりたくないことの勉強量の差が明らかに開いてしまっていたため、苦手なことをさぼるくせを直して、苦手なことも好きになれるぐらい練習することが大切だと思いました。今の私の技術は、他の同級生と比べて優れているものがありません。テストでは、本番に弱く、練習よりできなくて悔しい思いをすることがありました。そのため、この学校で学ぶ三年間を通して、何かの技術で一位になりたいです。例えば、この学校でカットといえばあの人やヘアセットといえばあの人など、尊敬されるような人になりたいです。自分自身に自信をつけることで、本番でも失敗せずに国家試験に合格できると思いました。

そこで私のこの夢を叶えるために今からできることを考えました。

一つめは、勉強を継続することです。技術面で言うとしたら、家での自主練習や、今の流行を知るために雑誌を見ることなどです。学習面では、教科書を何回も読み返すこ

とが一番だと思います。言葉で言うのは簡単ですが、なかなか実行するのが難しいため、この学校に入学させてもらった意味をしっかりと考えながら勉強していきたいです。

二つめは、色々な種類のサロンに行ってみることです。ターゲットとする客層が異なれば、お店の雰囲気も全く変わってきます。たくさんのお店に行ってみることで、自分が働いてみたいお店はこういう所だと具体的なイメージを持つことができると思います。

私には、もう一つ大きな夢があります。それは、海外で美容師として働くことです。この学校を卒業後、語学留学もかねたワーキングホリデー制度をやってみたいと思いました。高校入試の時にどんな美容師になりたいかや、どんな所で働いてみたいかを考える機会が増え、異国の地で働いてみたい、外国人の方の髪を切ってみたい、英語力を身に付けてみたいという気持ちが強くなっていました。将来どうなるかは自分にも分かりませんが、若いうちにできない経験がたくさんして人生観が広がればよいと思います。そして、どんなに難しいことでも挑戦させてくれる親に感謝し、恩返しできるような生き方をしたいです。

専修学校の部 最優秀賞

授業を通して学んだこと

東京エアトラベル・ホテル専門学校 二年

大津 紗理依

私は専門学校に入学してから今日まで、新しい言語を学んでいます。その言語とは英語でも中国語でもなく、「手話」です。私の学校では週に一回授業があります。一年次では指文字から始まり、自己紹介や簡単な日常会話を主に学び、二年次では接客業で役に立つ接遇手話を学びます。時には耳の不自由な講師の方と会話を行う授業もあります。そして学んだことを全校生徒の前で発表する『手話コンテスト』も開催されます。

手話を習い始めたころは楽しいとは思っていたものの、出来るようになるとは思っておらず、覚えたところで役に立つこともないと感じていました。

手話が言語だと感じたのはアルバイト先でのことです。私は、テーマパークでアルバイトをしています。ここではお誕生日や記念日のお客様に首からぶら下げるカードをお配りしており、そのカードをスタッフがシールやメッセージでお祝いするというサービスがあります。私は、ある女の子がそのカードを持っているのを見つけ、「おめでとう」と声をかけました。ほとんどのお客様は嬉しそうな顔をされるのですが、

その女の子は首を傾げ、不思議そうな顔をしていました。すると女の子のお母さんが私に耳が聞こえないことを教えてくださいました。そこで、次は手話を使い「おめでとう」と伝えました。「おめでとう」の手話は、両手を胸の高さで軽く握り、上に挙げながら指をパッと開きます。この一瞬の手話でその女の子は少し驚いた後、笑いながら涙を流していました。そして私に、「ありがとう」と伝えてくれました。六歳になったばかりの女の子のきれいなうれし涙を見たのは初めてです。このときに、「手話」も立派な言語であるということに初めて気づき、学んでいて良かったと思えた瞬間でした。

この経験を通して、今まで壁を感じていた聴覚障害者の方と接することに抵抗がなくなりました。手話を使って多くの会話が出来るようになった訳ではありません。まだまだ手話を使うという勇気が必要です。しかし、その後も聴覚障害者のお客様がいらした際には、あいさつや感謝の気持ちを伝えるときに口語や筆談ではなく、手話を使ってなるべく伝えるようにしています。

今までは、目や耳の不自由な方を見つけると障害者だと線引きできる限り関わらないような生活をしていました。差別はダメ、と学んできた当たり前のことができていませんでした。現在は、授業やアルバイト先での経験をを通して、今まで関わることのなかった人と関わるができる楽しさを学び、手話を学ぶ意欲も増しました。また、人を外見で判断して勝手に壁を作らないことも改めて学びました。

少子高齢化が進んでいる日本では、二〇二〇年東京オリンピックも開催され、外国人だけでなく、たくさんの人達で賑

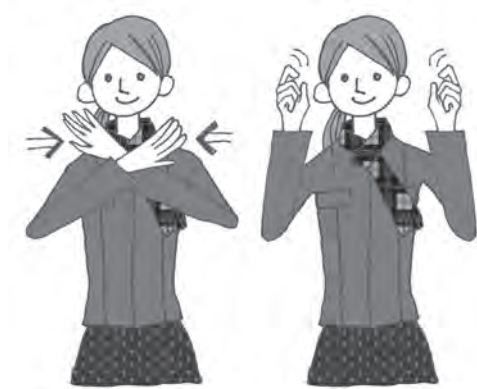
わいます。すべての人が同じ感動を味わえる瞬間の中で、私自身誰かの役に立ちたいと強く思い、車いすの方やお身体が不自由な方々をサポートすることができ、「サービス助手士」という資格も取得しました。今はこの資格を生かし、サッカーの試合のボランティアなどに積極的に参加をしています。

専門学校に入学して、手話の授業だけでなく、すべての授業や学校生活の中で、社会人としてのマナーや立ち居振る舞いを学ぶ機会が多くあり、様々な場所で習ったことを実践できていると感じています。役に立つこともないと思っていた考え方も、それを生かすのか生かさないのかは自分自身の行動で変わるのだ、ということに気づけたことも大きな成長だと捉えています。

卒業までの残りの時間も、自分自身の限界を決めず、何事にも挑戦をしていきたいです。そして、来年の春に向け、立派な社会人になれるようしっかりと準備をしていきたいと思っています。

新しい「手話」という言語を学んだことにより、世界が変わって見えました。

今練習している手話を使った歌を全部覚えたら、またどこかで披露することが現在の目標です。



専修学校の部 優秀賞

私の進路、将来の夢

東京エアトラベル・ホテル専門学校 二年

秋田 真佑

『ご搭乗ありがとうございます。』

この言葉を聞くと毎回背筋がピンと伸びます。地元の富山から羽田までの飛行時間は一時間。幼い頃からこの路線をよく利用していた私は、短時間の中で凛とした姿と笑顔で、私をファンにした客室乗務員という職業に漠然とした憧れがありました。しかし、自分に自信がなかった私は客室乗務員が夢であることにどこか恥ずかしさを感じ、高校生になってもなかなか言い出すことができませんでした。そんな中、当時陸上競技部に所属していた私は、練習中の顧問の先生一言が印象に残りました。「いつまでも強い選手になりたいと思っているだけではいけない、なると断言しなさい。」この言葉は陸上競技に関してはもちろん、客室乗務員への憧れに対しても言われているようでした。

その日から私は『客室乗務員になる』と友人や家族に言うようになりました。もしかすると心の中で笑っていた人もいたかもしれませんが。しかし、言葉にすることで私の中の客室乗務員が『憧れ』から『夢』に変わり、私を大きく変えました。なんとなくみんなと同じように大学へ行こうとしてい

た進路選択は、夢が明確になったことで専門学校への入学を決意しました。それに加えて英語に力を入れるようになったり、部活動での辛い練習も、上を見上げると真っ直ぐに飛び立つ飛行機に勇気付けられ、これまで以上に身が入りました。何よりも、夢に向かって行動を始めることで少しでも自分に自信が持てるようになりました。

上京して専門学校に入学し、周りの大学生と比べて授業数や課題の多さ、資格取得など大変でしたが、授業やインターシップを通して航空業界に関する知識が増えることに喜びと充実感を感じました。同時に客室乗務員が『夢』から『目標』へと変わりました。そして二年生になり、すぐに就職活動が始まり、最初は不安ばかりの毎日でした。しかし「なりたい」ではなく、「なる」という強い意志を持ちながらも、どうせならば楽しみたいと思いました。遠くから応援してくれる家族や友人、多くのアドバイスをくださった先生、同じ気持ちで戦い、たくさんの刺激をくれたクラスメイトに支えられ、選考が進むにつれて楽しんでる自分がいました。その結果、運良くご縁があり、第一志望の航空会社の客室乗務員に内定を頂くことができました。内定の電話を頂いた時のうれし涙、多くの人の支えがあつての内定であるという感謝の気持ちを忘れません。特に幼い頃、客室乗務員という仕事を覚えてくれた両親に一番感謝しています。

客室乗務員は限られた空間や時間の中で、安全を第一に人の命を預かりサービスや機内販売を行い、時には母のような存在、時には看護師、時には介助士のように一人何役もこなします。そしてリーダーを増やすために、私がこれまで取

得た資格はもちろん、学んだことや体験したこと全てを生かすことで、座席だけではなく、私の人間性もが商品になるのではないかと思います。私にとって責任感のある魅力的な仕事です。しかし長年の目標であっても働き始めると上手くいかないことが多いと思います。陸上競技を通して学んだ『失敗から学ぶことは多く、自分自身の成長につながることを』を忘れずに、目の前のことに向き合いたいと考えています。

入社後の目標は『私という人間を通して、会社に誇りを持ち、そして日本を一人でも多くの方に好きになって頂く』ことです。そのために、常に感謝の気持ちを言葉だけではなく、日本らしい丁寧な所作や行動で伝えます。そして客室乗務員としての成長はもちろんですが、私自身が地方出身ということもあり、地域貢献活動などに積極的に参加することで日本を盛り上げ、活躍の場を広げることができればうれしいです。入社後の目標を必ず実現します。



専修学校の部 佳作

私の生きがい

東京エアトラベル・ホテル専門学校 二年

下村 拓海

人生を豊かにするものは、世の中にたくさんあります。温かい家庭に食事、友達、知識など、他にも人それぞれ考えるものは違うと思います。人々はそれらを得るために、学生であるならば勉強、部活動、アルバイトに励み、社会人であるならば仕事をします。それらを得ることを「生きがい」とするならば、誰しも生きがいを持ち努力することになります。すなわち、生きがい＝自分の原動力＝人生を豊かにするということだと思います。人それぞれ小さなことから大きな野望まで、生きがいというものは違いますが、行きつく先は幸せということに変わりはありません。

ただ、私はそれを漠然なものとしか考えることができません。そう思うのは私だけではないと思います。その原因はと考えると、経験の数や環境、年齢にあると思います。例えば、大切な人ができるという経験をすると、その人から愛されていると実感出来たら、その人を守ろうと思えたならそれが生きがいになるでしょう。戦争をしている地域に生まれ、小さい時から武器を持ち、家族を守るために戦って逃げても生きがいとなるでしょう。子供の時は生きがいという言葉

聞きもせず、考えもせず、無邪気に遊んでいたなと思うでしょう。

私も、小さい頃に生きがいなんて考えたことがありませんでした。意識をするようになったのは高校生になってからだと思います。そこで得た仕事をする大変さや楽しさ、お金をもらうことの有難さ、地域の人達との繋がりの大切さを学びました。なにより、アルバイトをしている時の自分は少しでも社会に貢献している気がして、今まで生きがいというものを知らずにいた私に、初めて意識させるきっかけとなりました。

そして今私は、専門学校に通っており、鉄道科を専攻しています。専門学校に入学できたことが私の人生のターニングポイントだったと今は強く思います。もともと高校では大学に進学するものだと思います。何をしたいかも定かではないまま呑気に生活をしていました。そのため、勉強にも力が入らず、怠惰な生活をしていたので思い出すと恥ずかしい気持ちになります。そんな訳でセンター試験でも結果を残せる訳もなく、大学はあきらめるしかありませんでした。卒業式も控える三月にこれからどうしようかと考えていた時に、ふと小さい頃から鉄道が好きだということが頭をよぎりました。私の父親は鉄道が好きで、よく一緒に沿線に鉄道を見に行ったり、家で模型を鑑賞したりしていました。それをきっかけに鉄道が好きになり、母親を巻き込み、あてもなく電車に乗って出かけたりました。しかし年を重ねるにつれて、それはただの趣味であると決めつけるようになり、頭の片隅にはあるその存在感は大きくなっていました。私はすぐに鉄道科のある学

校を探し、今の学校を選択しました。今では運命だったと思いますし、本当に人生のターニングポイントだったと。入学してからは同じ目標を持つ友達と切磋琢磨し、好きなことに關しての勉強ができることに、とても充実していました。一年生の終わり頃から就職活動に向けての準備が始まり、二年生の四月には内定を頂きました。あっという間に月日が去ったと感じました。その内定を頂いた会社には私の学校から三人までしかエントリーすることができなく、学校の中でまず選抜がありました。そして様々な専門学校から三十人ほど就職試験を受けて選ばれたのは七人でした。その壁を乗り越えることができたのは、私の入学してから持ち続けた、鉄道会社に就職するという強い意志のおかげであり、なにより私が今の学校を選んだからだと思います。そして、その会社を志望した理由は、このテーマでもある生きがいとこの会社よりも得られると思ったからです。給料や福利厚生がいいことなど会社選びには様々な理由があると思いますが、私はこの会社に就職した先輩方は生き生きしていて、仕事と私生活ともに充実しているのが伝わってきました。その姿を見てからは、その会社一択でした。そして今は、社会人になってからの生きがいについて考えています。まずは社会に貢献できるように、仕事を早く覚えて戦力になれるようにします。そして家庭を持つようになったら、立派な父となり支えていきます。メリハリを持って仕事と私生活を両立します。そして、なにより会社の人やお客様に憧れられる鉄道員になります。私が鉄道を好きになったのは、鉄道が格好いいと思ったのはもちろん、それをチームプレーで動かす鉄道員の人達に憧れ

を抱いたからです。私は鉄道員からもらった憧れというバトンを子供たちに渡すことがなにより生きがいだと考えています。

あるネットの大百科には、生きがいとは「人生の意味や価値など、人の生を鼓舞し、その人の生を根拠づけるものを広く指す。生きがいは漠然とした生の実感としてほとんど当人に無意識に生きられていく場合と、自覚的に人生の営みに取り込まれる場合とがある。」と書いてありました。今までは無意識に感じていたであろう生きがいを、これからはいろいろな経験を積みながら、自分は生きがいを持って生きていると感じることにします。自分を鼓舞し、人生を豊かにしていきたいと思います。



学習に対する心構えと学んだ事

青山製図専門学校 二年

加藤 真実

私は建築専門学校に通っている学生です。建築の勉強をするために入学しましたが、自分の考えの甘さもあり、しっかりと行けどころか「始めたばかり」と甘えていました。だらけて勉強も疎かになっていました。そんな私が一番叩きつけられたことは進級課題でした。

グループ七人で一つの集合住宅のプラン、模型を作成するという進級課題でした。進級制作を進めるうちに、皆自分にはない何かを持っていると感じました。私も模型作りは好きでしたが、それだけだと感じ、途端に恥ずかしくなった事は今でもよく覚えています。人より怠けてきた私は少しでも力になれるように出来るだけ毎日放課後残るようにし、出来る作業や資料集め、自分の意見をなるべく伝えるようにしました。その中で気づいた事がありました。

私は今まで人に自分のプランを見せる事、考えを伝えたことがあまりなかったのです。初めてグループで話すことにより「人の考えを取り入れる」「良いところを盗む。」今まで作品集や実際の作品を見てもピンと来なかった言葉が、ストンと胸に落ちてきました。自分で実際に聞くことにより、初めて理解できたと同時に、新鮮でした。人とプランについて、

デザインについて意見をぶつけ合う事を怖いと考えていましたが、自分の意見に人の意見が加わる事や、アドバイスされた事でより一層プランが良くなる事に気が付きました。物足りなかったものが分かった時はとてもスッキリしました。その時楽しいと思えたことが今の私の原動力になっています。それに気づけるまでも時間がかかりました。

二年次に進級した当初は何も気づけずにはいました。就職活動も始まり、とても不安になりました。何か残したいと思うようになりました。二年目で新しく取り組んだ課題では、一年次の頃とは違い、一から建物を考えるのではなく既存の建物に手を加えてよくする、修復、再生させるという内容のものでした。リノベーションと言われています。リノベーション課題で初めに感じたことは、今までのようではダメだということでした。力不足な部分、全部に力を注ぐことはすぐには難しいと思いました。しかし、ひとつひとつに力を注ぐことで、自分の納得いく内容に、経験になれるのかもしれないと思い、目標をたて取り組むようになりました。情報を調べたり、人に聞いたり、意見をもらうことで自分に取り込むことが出来たり、課題を進めるにあたって、何が取り込めたか悩んでいたグループ課題での経験が活かされました。皆の意見、モチーフや建物を覚えていたことに驚きました。二年次で初めて、課題で経験したことは自分の中に残っていたのだと思うことができました。そう思えるようになったことで少し自信ができました。人にプランを見せるようにも慣れましたし、わからないことを聞きに行くようにもなりました。当たり前のようなことが前よりもできるようになりました。意見をも

らうことで、課題を進める楽しさを覚えました。そして何より知識が身につけていくことが嬉しいと感じることができました。力を入れるようになり、資格試験やテスト勉強にも身を入れるようになりました。答えられた時、覚えられた時が楽しくて、勉強が楽しいと初めて思うことができ、負けたくないと思える相手も出来ました。合格や赤点ギリギリのラインなどではなく、相手よりもっと良い点と目標を立てるようになりました。

苦しかった時期があり、自分は何もないと悩んだ時期がありました。グループ課題で得たものに気づけたことにより、少しでも成長できたと思うことができました。要領が悪い点もあり、効率をよくする等、自分に対する課題は多いですが、一つずつこなしていき、卒業時に何を学んできたか、得たものは何か、得たものを胸張って言える人になろうと思います。



平成 29 年度 作文コンクール 応募校一覧（応募数・入選数）

〈中学校の部〉

番号	区市名	学校名	応募 人数	入選 者数
1	中央区	佃中学校	7	2
2		晴海中学校	5	
3	新宿区	牛込第二中学校	1	
4		新宿西戸山中学校	3	
5		西早稲田中学校	2	1
6	台東区	御徒町台東中学校	1	
7	墨田区	吾嬬立花中学校	5	1
8		桜堤中学校	3	
9		寺島中学校	4	
10		両国中学校	2	
11	江東区	第二亀戸中学校	4	
12		第二砂町中学校	1	
13	品川区	日野学園	3	1
14	大田区	大森第一中学校	2	2
15		大森第六中学校	10	
16	世田谷区	烏山中学校	10	
17		用賀中学校	5	
18	渋谷区	鉢山中学校	1	1
19	杉並区	松溪中学校	3	1
20	豊島区	千登世橋中学校	3	1
21	北区	稲付中学校	10	3
22	荒川区	第三中学校	5	1
23		第七中学校	5	1
24	練馬区	開進第三中学校	1	
25	足立区	江南中学校	3	
26	葛飾区	一之台中学校	2	
27		葛美中学校	10	
28		堀切中学校	10	
29	東村山市	東村山第四中学校	3	2
30	青梅市	泉中学校	1	
31	町田市	真光寺中学校	10	2
32	東京都	大泉高等学校附属 中学校	10	4
33	私立	愛国中学校	4	
計			149	23

〈高等学校の部〉

番号	学校名	応募 人数	入選 者数
1	都立農芸高等学校（全）	10	1
2	都立農芸高等学校（定）	7	
3	都立農業高等学校	6	
4	都立瑞穂農芸高等学校	10	3
5	都立農産高等学校（全）	8	3
6	都立農産高等学校（定）	1	
7	都立園芸高等学校	10	
8	都立大島高等学校	1	1
9	都立田無工業高等学校	2	2
10	都立小金井工業高等学校	2	2
11	都立墨田工業高等学校	1	
12	都立赤羽商業高等学校	8	
13	都立葛飾商業高等学校	9	
14	都立忍岡高等学校	10	
15	都立大島海洋国際高等学校	3	2
16	愛国高等学校	10	3
17	日本工業大学駒場高等学校	10	
18	国際理容美容専門学校 （美容高等科）	7	1
計		115	18

〈専修学校の部〉

番号	学校名	応募 人数	入選 者数
1	青山製図専門学校	10	1
2	東京エアトラベル・ホテル専門学校	10	3

〈まとめ〉

番号	区 分	応募校数	応募人数	入選数
1	中 学 校	33	149	23
2	高等学校	18	115	18
3	専修学校	2	20	4
	総 計	53	284	45

平成二十九年 度 作文選考委員名簿 (順不同・敬称略)

中学校の部

委員長	町田市立真光寺中学校	校長	矢島 加都美
委員	中央区立日本橋中学校	校長	平松 功治
委員	葛飾区立葛美中学校	校長	志村 昌孝
委員	葛飾区立一之台中学校	校長	入山 賢一
委員	世田谷区立烏山中学校	校長	飯塚 和彦
委員	足立区立第十中学校	校長	早乙女 雄一郎
委員	足立区立江南中学校	校長	宮下 みどり
委員	八王子市立上柚木中学校	校長	坂詰 悦子
委員	小平市立小平第五中学校	副校長	深井 明美
委員	荒川区立赤土小学校	副校長	出井 玲子
委員	教育庁指導部義務教育指導課	統括指導主事	吉川 泰弘
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	馬場 一平

高等学校・専修学校の部

委員長	東京都立農業高等学校	校長	齋藤 義弘
委員	東京都立杉並工業高等学校	校長	高 幹明
委員	東京都立荒川商業高等学校	校長	長江 誠
委員	東京都立翔陽高等学校	副校長	木田 貴子
委員	東京都立杉並総合高等学校	校長	倉本 武雄
委員	日本工業大学駒場高等学校	教諭	原田 宏子
委員	安部学院高等学校	校長	安部 元彦
委員	学校法人中央工学校	広報センター長	高橋 隆泰
委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	指導主事	山本 進一
委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	課長代理	中村 留美

あとがき

平成29年度の作文コンクールは7月の応募作品の募集に始まり、応募作品に対して9月に第一次選考を行いました。次いで10月には第二次選考を行い入選作品が決定されました。選考結果の発表連絡を11月に行い、12月14日に全商會館において入選者を対象に表彰式を挙行いたしました。そしてこの作文コンクール入選作品集「明日に生きる」第28号を発行することができました。

この間、応募してくださった多くの中学校、高等学校、専修学校の生徒や学生の皆さん、ご指導いただいた先生方、厳正かつ公平な審査をしていただいた選考委員の方々、さらにこの作文コンクール業務の運営等にご協力やご尽力いただいた多くの皆様方に心より感謝申し上げます。

今年度の応募作品数については、中学校からは149編・33校、高等学校からは115編・18校、専修学校からは20編・2校の応募がありました。お陰様でこの3年間の応募作品数は増加傾向にあります。3年前に大きく減少し、危機感を抱いて数々の対応策を講じた結果、漸く従前の水準まで回復することができました。

しかし、応募数は回復傾向にあるものの、応募校数は伸び悩んでいる現状があります。特に専修学校は応募校数が低迷しており、専修学校への作文コンクールの周知や応募への啓発普及活動が、来年度の課題であると考えています。

作文の内容(テーマ)については、校種別に特徴があります。中学校では職場体験やボランティア活動に関する内容、自分の進路や将来の夢に関する内容が多くなっています。高等学校では進路や将来の夢の内容、授業を通して学んだことに関する内容が多数を占めています。さらに専修学校では授業を通して学んだこと、自分の生きがいに関することの順に多くなっています。

中学生は職場体験によって初めて仕事や社会に触れた印象やそれを通して自分の将来を考えるようになり、専門学校や専修学校に進学した生徒や学生は現に学んでいることを通して自分の将来や生きがいを考えるようになっていくという、青年の成長段階に即した内容選択となっています。

それぞれの生徒や学生たちが日々の学習活動や様々な体験活動から学び得たことを通して自分自身の在り方や生き方、将来の夢を模索する作品が多く寄せられました。生徒や学生が作文を通して自ら学ぶ意義を考え、将来の夢の実現のきっかけとなることが、学校生活の充実や進路を考える一助となれば幸いです。

この作文集はそれぞれの作品の原文を出来る限り尊重し、原則として原文どおりに編集しました。しかし、人権上問題のある表現や明らかな誤字や脱字につきましたは作品の文意を損なわない範囲で直させていただきました。

最後に、この作文集が会員校のみならず、広く教育機関等で活用されることを切に期待しております。

明日に生きる 第二十八号

— 作文コンクール入選作品集 —

平成三十年三月一日 発行

発 行 東京都産業教育振興会

〒二六三八〇一 東京都新宿区西新宿二一八一
東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内
電 話 〇三―五三二〇―六七二九
FAX 〇三―五三八八―一七二七

印 刷 株式会社小葉印刷所